攝名所圖會

前編 巻之二

和書門

類	號	函	架	册
	八八七二	一八四	二	一

内閣文庫

和書 類	號	册	架	函
	八八七二	一一	一四	一七二

内閣文庫

番號	和	8872
册數	11 (2)	
函號	172	177

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

都名所圖會巻之二目録

平安城尾

官者殿社　祇園御旅所　四條道場金蓮寺　十住心院 染殿地藏
大雲院　祇園會鉾場　同山鉾圖　手洗水圖
座頭積塔　四條河原夕涼　同芝居　目疾地藏
宮川 鴨川の末　建仁禪寺　蛭子社　六道珍皇寺
六波羅蜜寺　姿見の池　阿古屋塚　焰魔堂
愛宕寺　晴明社　十禪寺社　若宮八幡
五條橋　首途八幡　御影堂　鏡の池
塩竈井　本覺寺　塩竈山上徳寺　塩竈社
太子堂　新善光寺　蓮光寺　長講堂
萬寿寺天満宮　竹林院　鬼頭天皇　等善寺
橘行平卿塚　市中山金光寺　延壽寺　夕顔塚

雞の池
佛光寺
因幡薬師
諏訪社
一音寺
新住吉
天道社
古醒井
本國寺 加藤清正墳
東殿
歓喜寺
芹根水
道祖神

藍染川
神明宮
繁昌社
新玉津嶋社
壬生寺
荒神社
御太刀松
人丸社
興正寺
松明殿
判官塚
月見橋
稲荷御旅所

花園稲荷社
大原社
朝日宮
菅大臣社
同狂玄圖
化粧水
石上宮
醒井
常樂寺
稲荷祭礼所
宇賀社
稲荷社
藏王森

後成御社
白天神
神明宮
五条天神宮
蛭子森
枚坂子
更雀寺
西本願寺
東本願寺
金光寺
籔内紹智家
不動堂
寛算石

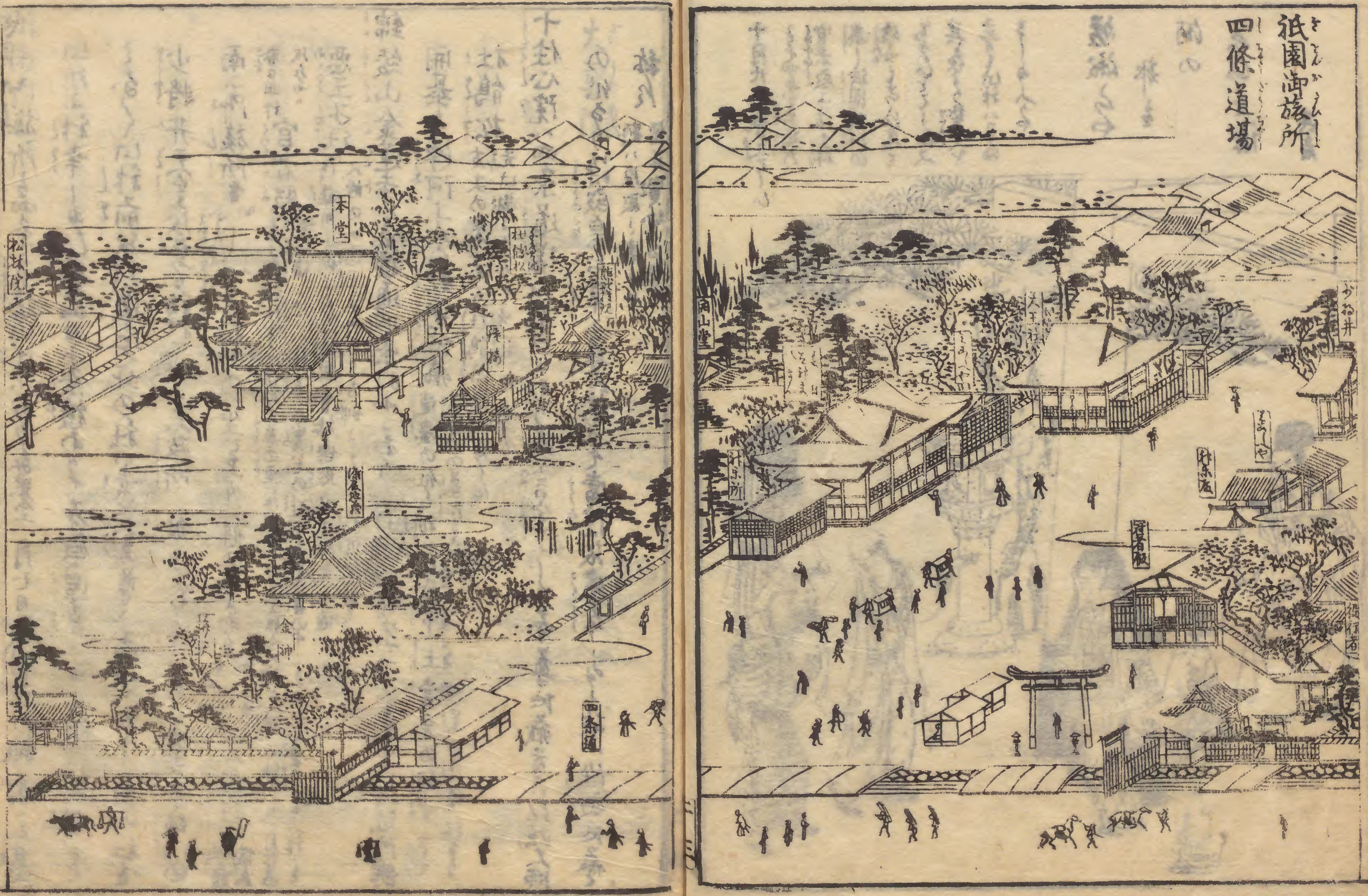
春日森
古井社
三鈷松
六孫王社
福大明神森

古御旅
清盛旧地
松子坊松
誕生水
人丸塚

宗守長老
住吉社
羅生門旧跡
満仲公誕生地
嶋原傾城町

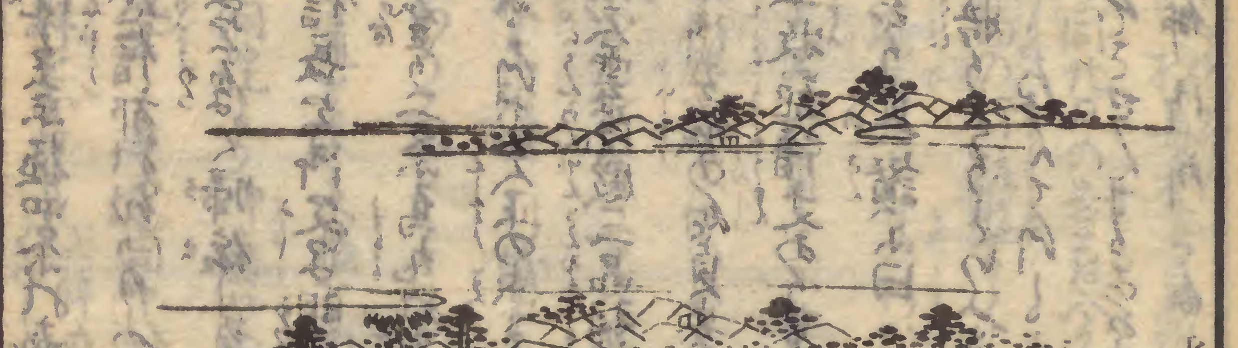
粟嶋社
東寺
大通寺
歓喜森

十月廿日ハ誓文はらひとて四条京極乃官者殿に詣て群集し祇園鴨川の遊女もおほく来てちりひそそくひえ其夜より誓文を立る此神へ参りゆるしおそや
暖簾にや 都は 酒の にほひを誰
其角



祇園御旅所
四條道場

大雲院

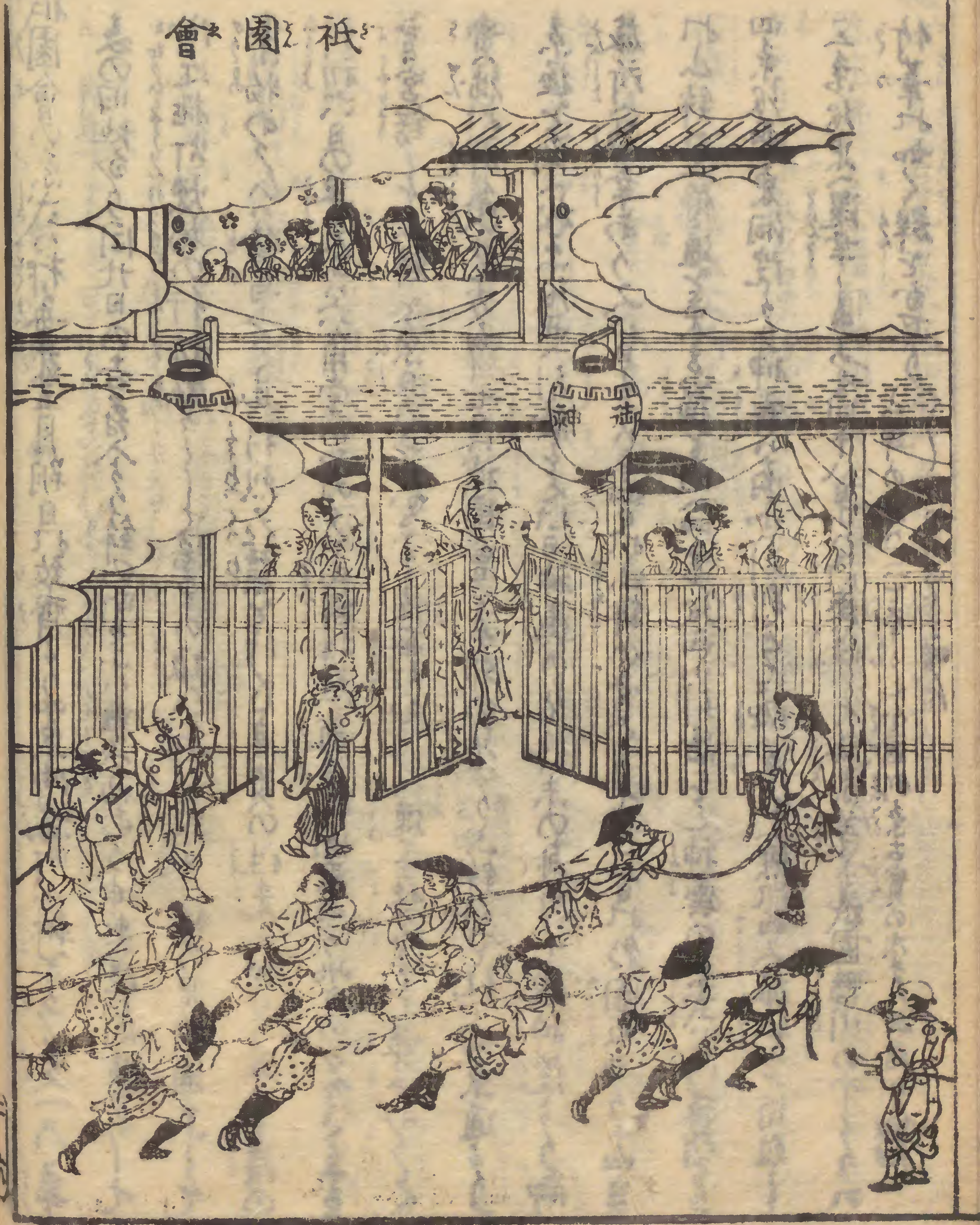


祇園御旅所　四条京極の辻にあり毎年六月七日祇園會に神輿こゝに来る
此所に神幸しまして十四日に祭禮ありて本殿へ還幸し給ふ両日ともに山鉾を
こゝかしこ此神前を引渡す東の北の社は素戔嗚尊八王子なり南の社は
少将井天王と称する初は一坐は大政所と號してむかしは烏丸通五条坊門の
南に御旅所有　今大政所町といふ　少将井の一坐は烏丸二條の南にあり　今少将井町といふ　二坐の社は
春日明神くわんじやうの官者殿　くわんじやの所の神は世に土佐坊正尊の霊なりといふ今祇園の文書起請文の神とす
悪王子社　作旅所町の北側にあり祇園會神輿臨幸の時烏丸通の悪王子町よりこゝにうつして祇園社
錦綾山金蓮寺は京極通四条北にあり　四条道場と称す時宗にして本尊は阿弥陀佛
開基は浄阿上人なり釈迦地蔵　運慶の作なり初は　熊野社　當寺の鎮守なり
杜鵑松　方丈の東にあり杜鵑洛陽に至りて啼し旧跡なり　先此樹に至りて啼と云
十住心院は四条道場の南にあり真言宗にして本尊地蔵菩薩は弘法大師
の作なり染殿皇后常に尊信ありて當院を建立し給ふ故に染殿地蔵
と称す　額は染殿と書して僧正賢賀の筆なり

龍池山大雲院ハ京極四条の南にあり浄土宗にして智恩院に属す本尊阿
弥陀仏ハ恵心僧都の作なり開基ハ貞安上人なり此人安土論の時浄家の宏
ちおうて信長公厚く帰依しあひだ江州ハ幡山西光寺を建立して貞安にあたへ
住職この時に信長公御父子明智光秀が為に生害しあひ貞安上人侍者十人を
召つれ京都より登り二条の馬丸にて遺骸の落室殿かしこにて御菩提を弔ひ其後
秀吉公の命によりて寺の地の末に織田信忠卿追福のため当院を草創しの
卿の法名によりて大雲院殿三品羽林仙巌居士と称し当院の號是によれり 信長公信忠公両卿の墓所あり
信長公安土に御在城の時貞安上人に七種の宝物を賜ふ今当院の什宝とす其中
に法然上人の一枚起請文あり是ハ一体和尚の筆なり奥に絵讃あり図ハ達磨大師
の後向の画なり其讃に曰

達磨悟りとらいさうなる胸より仰ぐを
なんてひしまをわたるそ〇のかたち
九年まてさせんするもおもしろや是れ我の此ハ泳けの一筆
御佛所さん　一体判

祇園會の祭式ハ都毎年五月朔日に致齋より四条御旅町に榊をたつ是一乃華
表の旧地なり同廿日の吉符入より鉾の町々にハ雑子初あり神輿洗ハ同晦日にして
御迎挑灯煉物の行粧艶々として洛東の偉ひ也六月朔日ハ鉾の児祇園会へ
参物あり山ハ騎馬にて其行烈花麗をつくし高貴の往来に似たり五日ハ鉾の
引初ハ八日の早天より六角堂にて山鉾行烈前後の鬮取あり此日の夕方より
宵宮錺りして山鉾ともに日のぬくからるべき桃灯をともし連て夜の色をも雑しありく
貴賎の群集いふばかりなし七日ハ祇園会とて卯の刻より山鉾烈を乱ず四条通より
京極を南へ松原通西へ引渡とて此日神輿の祭礼ハ未の刻にして感神院より御
旅所へ神幸あり又八日より十四日まで山鉾の宮ありて十三日に鬮取あり十四日
に山鉾ハ三條通を東へ京極を南へ四条通を西に引渡して神輿の祭式ハ御旅所より
四条通西へ東洞院より神輿ハ南へ引別れて次の日二條の西大旅社にて同翌日
三条通東へ還幸しあって同十八日にハ御輿洗して晦日に等し祇園略川のかへり祝
竹華の如く群をなせり　山鉾の図ハ二ニて見るべし全図創祭古實の次第ハ祇園会細記に
くわしきゆへここに略す

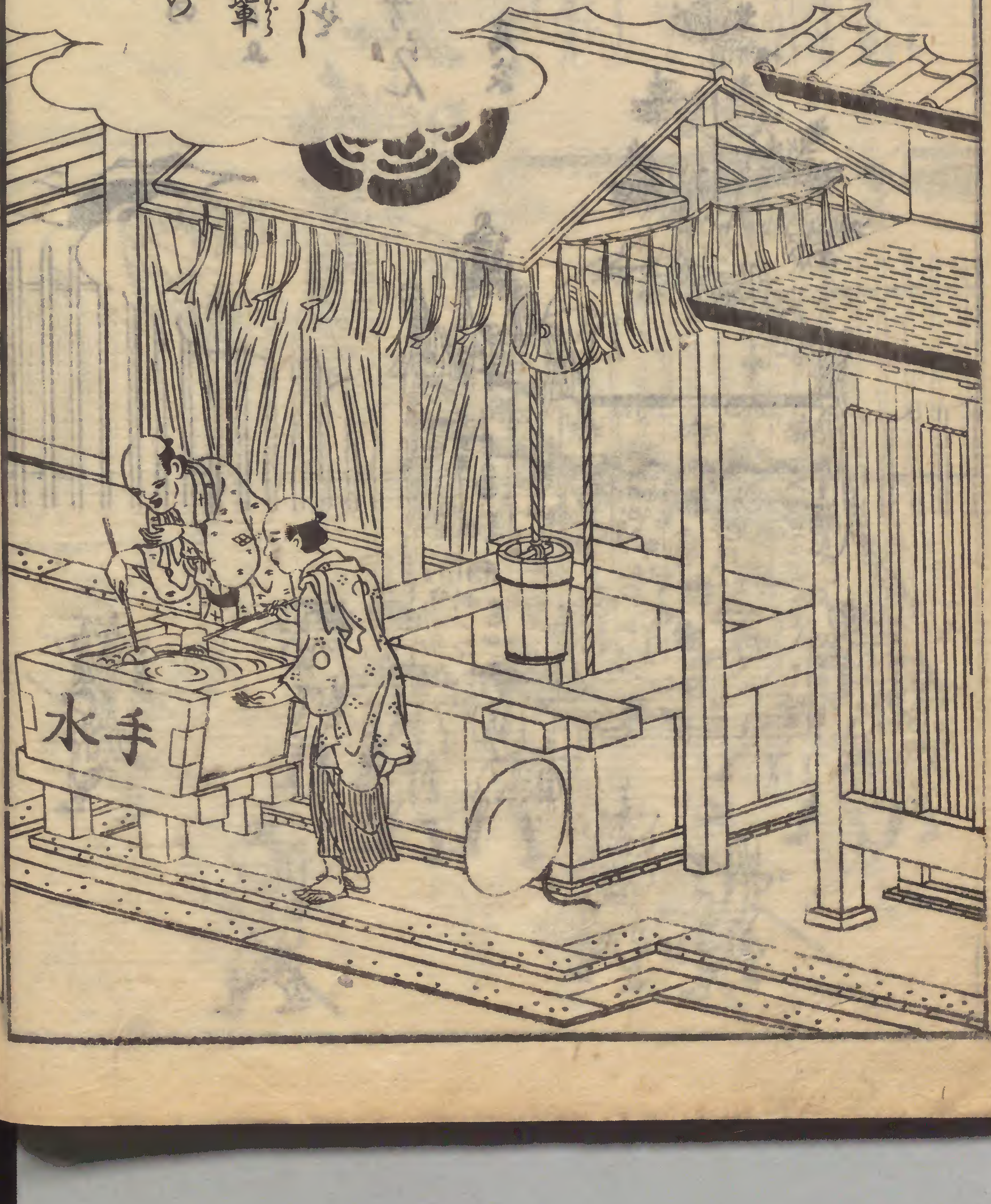

祇園會

鉾にのる人のきほひも都かな
其角

夫木
いかにした
ふるれ庭の
春の日に
神の園とも
たちならすらん
爲家

山鉾は示式にありしを
名も異なりし山崎の定
彌太舎人の笠飾洋所
の跳鉾家々に車風流
に造り山八撥撥なと
てありし粧ひ鹿織あり
今は和漢の錦繍をまとへ
七宝を鏤め荘厳に
して天下第一の壮観と
いふべし

手洗水ハ烏丸通錦小路の北にあり、むかし大政所町に祇園神輿乃御旅所ありし、これ参詣の輩このみて手水せしなる、此剣よりなり

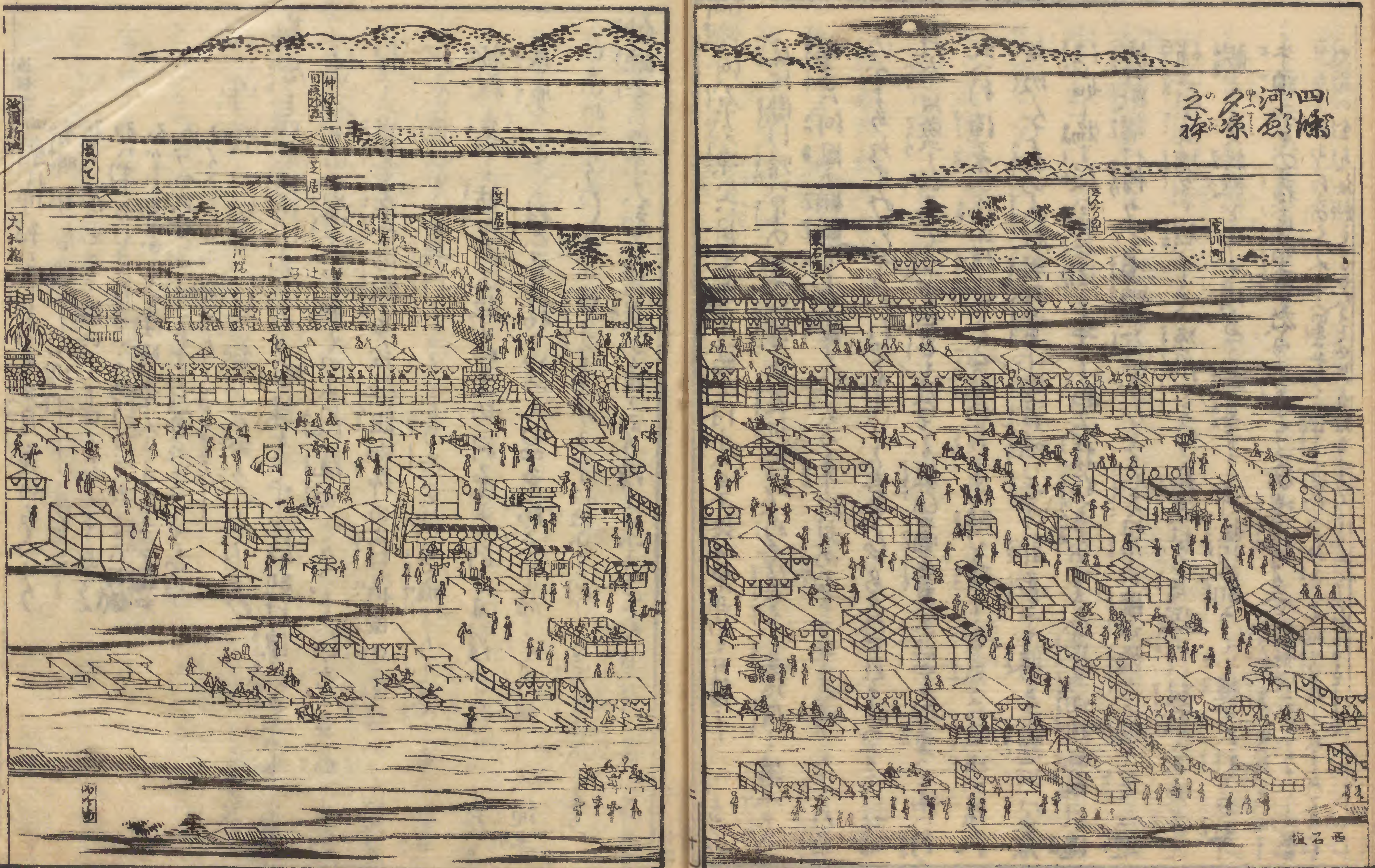


今も六月七日より十四日まで井をひらきて手水所となさる、凄冷なり、清泉にて比類なし、此水を服すれバ疫をのがるゝとぞ

座頭積塔ハ人王五十八代光孝天皇の姫宮雨夜内親王御眼盲目なりしゆへ洛中の女の盲目者を愛して御伽とせさせ給ふ賤しきハ官をたまハりて御前に侍る故に風儀となりて夫より男子の盲人も官級を望く座頭と称し撿挍勾當の官に至るも此内親王より遺風なり每年二月十六日ハ此姫宮の御祥忌なれバ座頭集まりて尊敬拝し東の河原に出て石を積て報恩をなす是を積塔といふ又六月十四日にも集會をなすこれを座頭の納涼といふなり是も則御弔なりとぞ今ハ高倉通五條坊門の北に集會所ありて二箇の積塔にハ會して琵琶を弾じて平家物語をうたふ此旧例をもつて此法を勤るなり又雨夜内親王ハ凍飢のものをあはれみ給ひて不便なりとおぼしめされ洛陽の左女牛に長屋をたてて青物の市をなさせらる今京都の青物の市ハ左女牛の因なりといへり

雨夜内親王の御事光孝天皇の系圖に分明ならず後考あるべし

四條河原夕涼ハ六月七日より始て同十八日に終る東西の青楼よりハ川辺に床を儲け燈ハ星の如く河原にハ床机をならべて流光に宴を催し濃紫の帽子ハ河風に翩翻として色よき姿を争ひ月の出るを待て扇のなまめかしきみやびやかなれバいづれもいとしほらしくぞ見ゆる妓婦ハ今を盛といろどりて芙蓉も及ハざる粧ひ蘭麝の匂ひはやされ薫て南へ行北へ行茶の店に休らふハ山家の茶香に酥を醍醐し香煎にハ鴨川の流れを汲んで京の名物を賞しかの口出ハ晋の郭象にも勝りて懸河の水を注が如し物まねハ幽谷にして押しぬる猿狂言あのすまひ曲馬曲枕麒麟の縄渡ハ鞦韆に倣ひて嗩吶の声喧しく見る店にハ瀧水滴々と落て暑を避硝子の音ハ珊々として籟し清風をまねく和蘭の名鳥深山の猛獣もあつめて観せしめ見物群をなして川辺に遊宴するも祇園の御祭にて小鬼を祭て退散し牛頭天皇の蘇民将来に教へ給ひしの遺法なりとぞ　昔ハ内裏より此時ハ群臣一同にせいかうありしをかんがへて四季おほく相替て造化ある故なり相生せだしまして秋に入りて涼しき天気の金氣を退るがゆへにその火氣をさまし給ふとかや


四條河原夕涼之体
東石垣
宮川町
祇園新地
大和橋
仲源寺
目疾地蔵
芝居
芝居
川端
西石垣

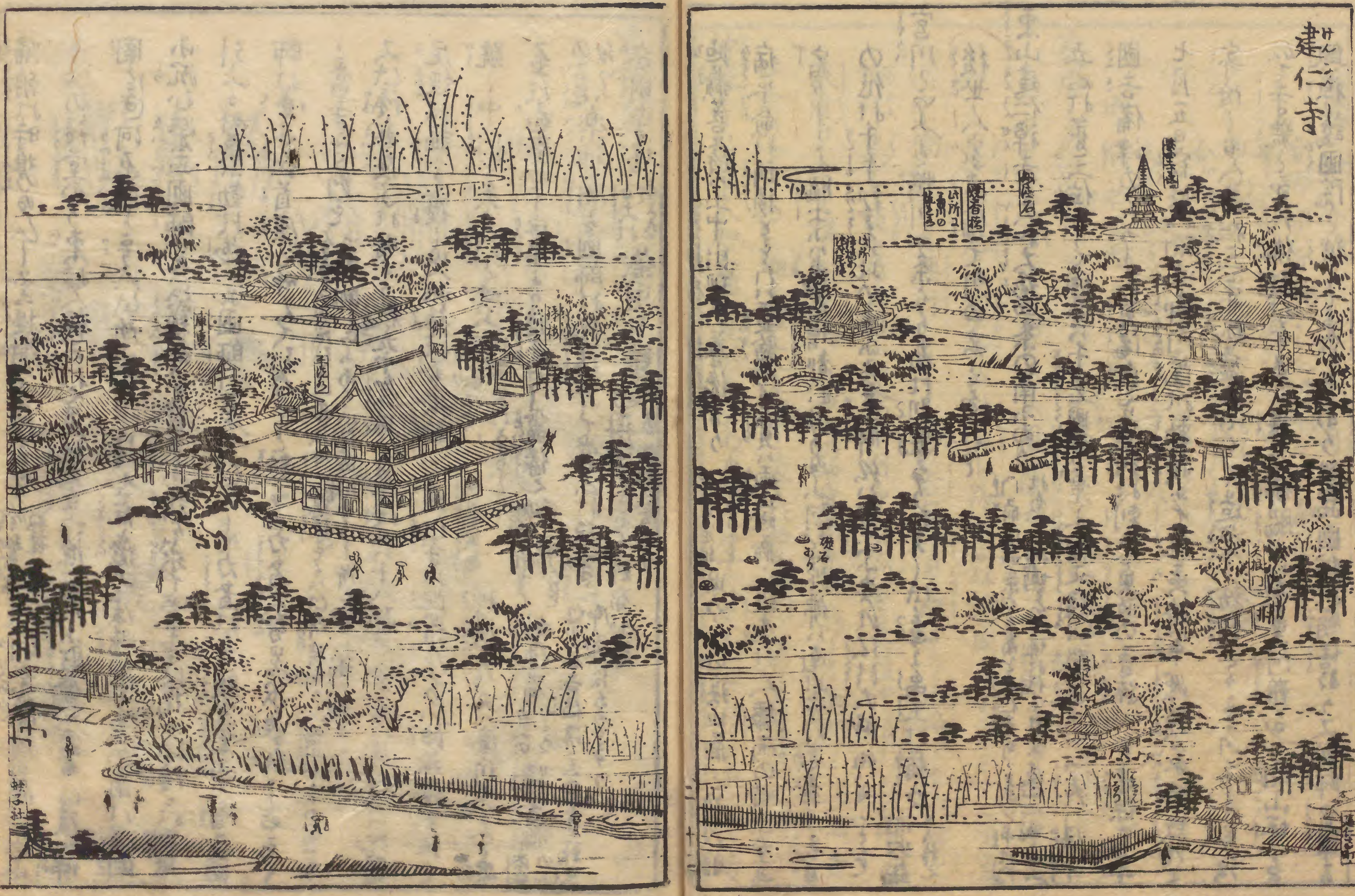
拾遺集　四条の川原をとをりて夕月夜のおもろより

有明の頃迄すゞしく川中へ出て床をならべ夜すがら酒のみのゝしりあそぶをんな
男は常のむすびめいつもりしくおとこは羽織
なげ着るかして法師老人もふところ主で撫や
かぶやれ背子まそそれかのあそうぶものの
ありさまとゝうふ都のたゞしきあるべし

川風や薄がき着たる夕すゞみ　はせを

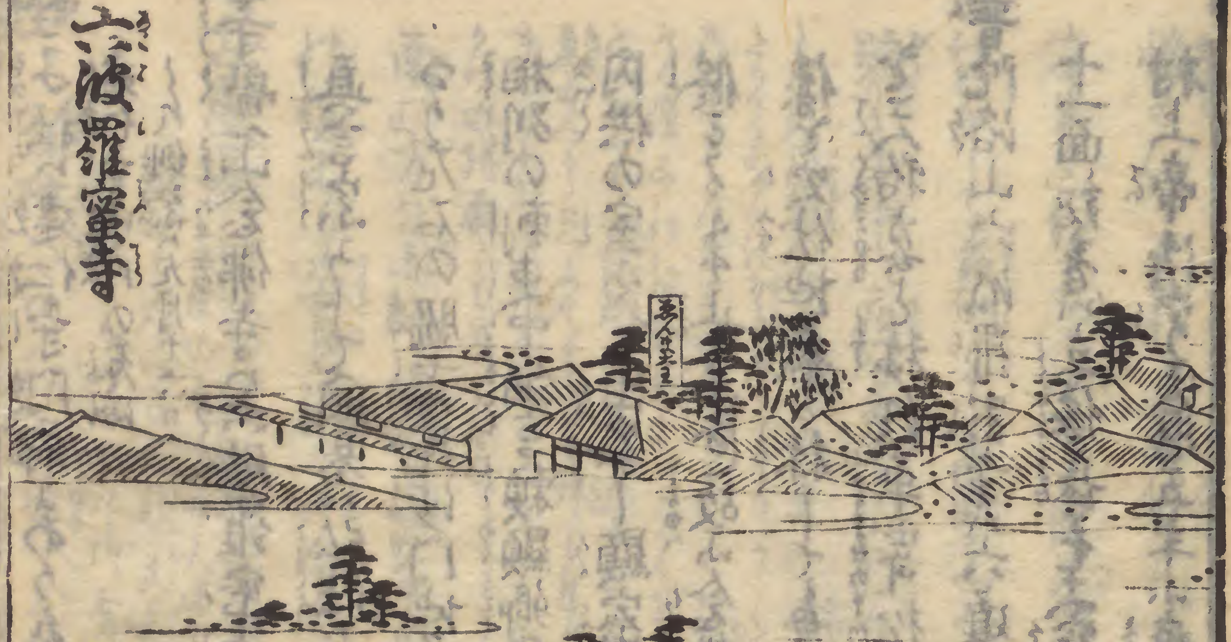
芝居は四条鴨川の東にあり永禄年中に江州の浪人名古屋三左衛門
といふもの出雲のお国といふ風流女とかたらひおどり舞妓となづ
けて男女立合の狂言を仕組小歌の本林祇園の宮林にありしが又四条
河原橋の西にて興行しけるを秀吉公伏見城より上洛し給ふ時見
物群集し妨に及ぶ故に四条の河原より川を直に渡中絶ありし所に
承応二年に村山又兵衛といふもの四条河原中橋にて再興し又縄手
四条の北にうつし遂に寛文年中に今の地にうつして常芝居となる
仲源寺は四条大和大路の巽の角にあり浄土宗にして智恩院に属す本尊

地蔵菩薩は土中出現の尊像なり（流よハ定朝の作なりとぞ）世の人目疾地蔵と称す眼
病平愈の祈願をなせハ霊験あり實ハ雨止地蔵往来の人驟雨の時此堂に
宿りしゆへ脇士には恵心僧都の作なり阿弥陀仏ハ南の方に安置し左日
の作は千手観音ハ北の方にあり薬師仏ハ方丈に安置弘法大師の作なりとぞ
宮川といふハ鴨川四条より南の別號なりむかし此辺に禹王の廟あり（洪水鎮の為に作る）
後世人家建續て町の名となれりと
東山建仁禅寺ハ大和大路四条の南にあり（門前通四条より南を建仁寺町といふ中此門より南を伏見海道といふ往代より建仁寺境内也）
五山の第三位にして開基ハ千光国師葉上僧正諱ハ栄西といふ姓ハ備中
國吉備津の人にして賀陽氏也薩摩別の刺史貞政の曽孫なり建保三年
七月五日寂す（七十五歳）土御門院の勅願にて征夷将軍源頼家卿敷地を
寄附しめし建仁二年伽藍ことごとく造営し勅願所となして年号を
以て寺號とす佛殿の本尊ハ釈迦仏脇士ハ迦葉阿難なり開山塔を
興禅護国院と號して東の丘にあり栄西国師の廟塔なり又国師宋国よ


建仁寺
方丈
佛殿

帰朝の時携へ来りし菩提樹ハ当院にあり今繁茂して数株となる河原院ハ仏殿の北
に二ツの鐘堂あり東ハ大鐘これ昔融大臣六條河原に殿舎を建ぬ後に仏
閣となる河原院と号す此所にありし鐘之荒廃の後鴨川七条の南の深淵
に沈む栄西国師是を窺知りて官吏に訴へ求て当寺に揚る此鐘を淵より
引上る時更に動ざる故に国師ねんごろにいのりて力者に音頭を栄西と唱へ又国
師の弟子長首座と呼んで引ざりしと教の力者大勢是を負揚しやすく
と当寺に引しを 今重き物を引に此名を呼で運送するハ此所謂ありし所之実ハ此鐘の謂なり 鴨川七条の南七町
又此鐘毎夜子の時より数九十声撞く晨鐘ハ六十八声合て百八撞く昔ハ陀羅
尼経を誦して撞しゆへ此鐘を称して建仁寺の陀羅尼といふ法水池と
号し中門を矢立門と呼ぶ此鐘の門なりとて 平家の一門脇教盛卿 禅居庵ハ摩利支天を安
置す加暦二年唐土より将来せし霊像之 応験新にして常に諸人参詣す 妙徳石 方丈の 焼香橋の
の石橋 楽神廟ハ国師の勧請にして当山の鎮守之 備中吉備津宮の第三の御子
阿ハ 方丈より 正伝院にあり 則有楽翁 御廟あるなり
安国寺塔 織田有楽塔の 正伝院にあり

六道
珍皇寺


六波羅蜜寺
本堂

蛭子社は建仁寺門前にありて祭る所蛭子命栄西國師勧請し給ふなり
建仁寺境内の惣社 しん例祭は九月十六日

等覺山念佛寺は六波羅密寺の西にあり むかしは愛宕里にありし今は當寺に移りて世人愛宕寺と称れ
真言宗にして開基は弘法大師中興は千観内供なり本尊 鉄坐千手千観の作
なり左右の脇士は毘沙門地蔵尊千観内供自作の像を安置す内供の俗姓は橘氏
相列の刺史中納言頼顕卿の子也幼名は千観丸といふ成長して叡山運照
内供の室に入て出家し顕密の碩学となりて一世の間常に六字の佛號を
修せられける故に念佛上人と呼ぶ又堂内に地蔵尊を安置す此
像を火伏地蔵と称して毎歳正月二日経を讀て法會火伏の札を出す又
天狗変と称れ車寄松 此松は千観内供法性寺より車に乗て往来し 此松に轅を寄しとぞ

普陀洛山六波羅密寺は六道の西にあり真言宗にして智積院に属す本尊
十一面観音は立像長一丈空也上人の作也 西國十七番札所又洛陽観音巡の其一なり 傳て曰
村上帝天暦五年に疫癘時行て死するもの数しらず空也上人是を
憐みて十一面観音の像を作りて車に乗せ洛中を自ら牽あるき給ふ今の當寺
本尊是なり観音に供せし曲茶を疫人にあたへけるに皆平愈す村上帝是を
歎し給ひて吉例として毎歳元三に服し給ふ万民今に此例をならひて名を王服と
號し年中の疫を免るゝとなり北の方は地蔵尊を安置す いにしへの七尊の像を本尊として六波羅の惣堂
と号す康頼の寶物集に曰東山に貧なる女ありけり常に此地蔵尊を信じける此女ふと老たる母を養ひ
けるがある時かれを葬死してけりいかにして葬んと案じ煩ひ居たりける所に
年の頃ばかりなる僧来りて何ゆゑかくは歎き給ふと問ければ事の子細をありのまゝに語る
なる僧さらば我家に葬し給へと言すてゝ去しかば女嬉しくて
六人おくり其後しばらくして此女嘆しさらばと地蔵の御前に詣でければ
為ありけるとぞ来りて拝しければ地蔵の御足に土つきけるを見て
まさしく此地蔵尊の御助なりと老母を葬りし事をかたりけりとぞ
うけの地蔵とも号しける

南の方は薬師佛を安置す傳教大師の作也開山堂は空也上人自作
の像あり姿見の池は上人此池にて姿をうつし自像をきざみ給ふとぞ

阿古屋塚 本堂の南にあり五条坂の遊女阿古屋が塚と云 上に
無縁の石塔并夫のやしろあり 空也上人いせたまひし縁の地
斗及よりけることは佛説また
弥陀のむかしの空しくなりし跡は此世の縁といふべし

上人あれは吹て　世の中やくらかるの雨やとりつかの信家ハ末世なりけり　空也上人

拾遺　一聲も南無阿弥陀佛といふ人の蓮の上にのほらぬハなし　仝

珍皇寺ハ建仁寺の南松原通にあり　六道と号ス　本尊薬師佛ハ傳教大師の作にて開基ハ慶俊僧都中興ハ弘法大師　篁堂ニハ小野篁の像を安置す　此所冥土へ通ひ路なりとて　焔魔堂ハ東北方にあり　迎接ハ七月九日十日参詣の人此鐘を撞て聖霊を迎しむるなり　六道辻　本堂の前にあり　当寺ハ人代平安城の葬所なり　桓武天皇延暦十三年に長岡より此京にうつし給ひ世の人此所を以て人々の葬所と定めらる　由延都記にみえたり　又愛宕とも云　源氏物語に桐壺の更衣を愛宕にて葬するよし見えしハ此所の事なり　河海抄にハ弘法大師の聖跡として東寺の長者管領するよしいにしへハ大伽藍にして有しとかや今ハ建仁寺の塔頭大昌院の兼帯所となる

北斗堂ハ六道の東弐町ばかりにあり北辰妙見を安置す前に高燈籠あり　此所ハ城南淀川の船運送の目当に常夜燈をかゝやかし熊野の洋曲に北斗の星の影をうつし應仁の兵火にかゝる　金森宗和江府より清水寺に贈し灯籠の倒れて苔に埋し此寺僧にえらひ吾妻の名物として今ハ此堂の前にあり

晴明社ハ宮川町の東松原の北にあり古ハ此地に安倍の晴明の塚ありしが新道の人家次第に及んで次第に塚崩れ平地となる故に其社を建て其霊を祭る

十禅師社ハ晴明社の南にあり昔ハ境地広くして樹林森々たり牛若丸此林にて千人斬ありしに武蔵坊弁慶も此神前に於て主従の約をなしけるとぞ

若宮八幡ハ五条橋東五町ばかり所石清水と同神なり又ハ六条佐女牛にあり故に佐女牛八幡と號す　例祭ハ八月十五日放生会あり　旧地ハ若宮通六条にあり今の若宮町是なり　今ハ其所の東洞院の西人家の裏に小社あり　天正年中に此所にうつりしを

五条橋ハ初ハ松原通にあり則むかしの五条通なり秀吉公の時此所にうつし給ふ

五条橋通といふ寳ハ條坊門之欄干に紫銅擬寳珠左右に十六本ありて小の方西より四ッ目に橋の銘あり

雒陽五条石橋正保二年乙酉十一月吉日

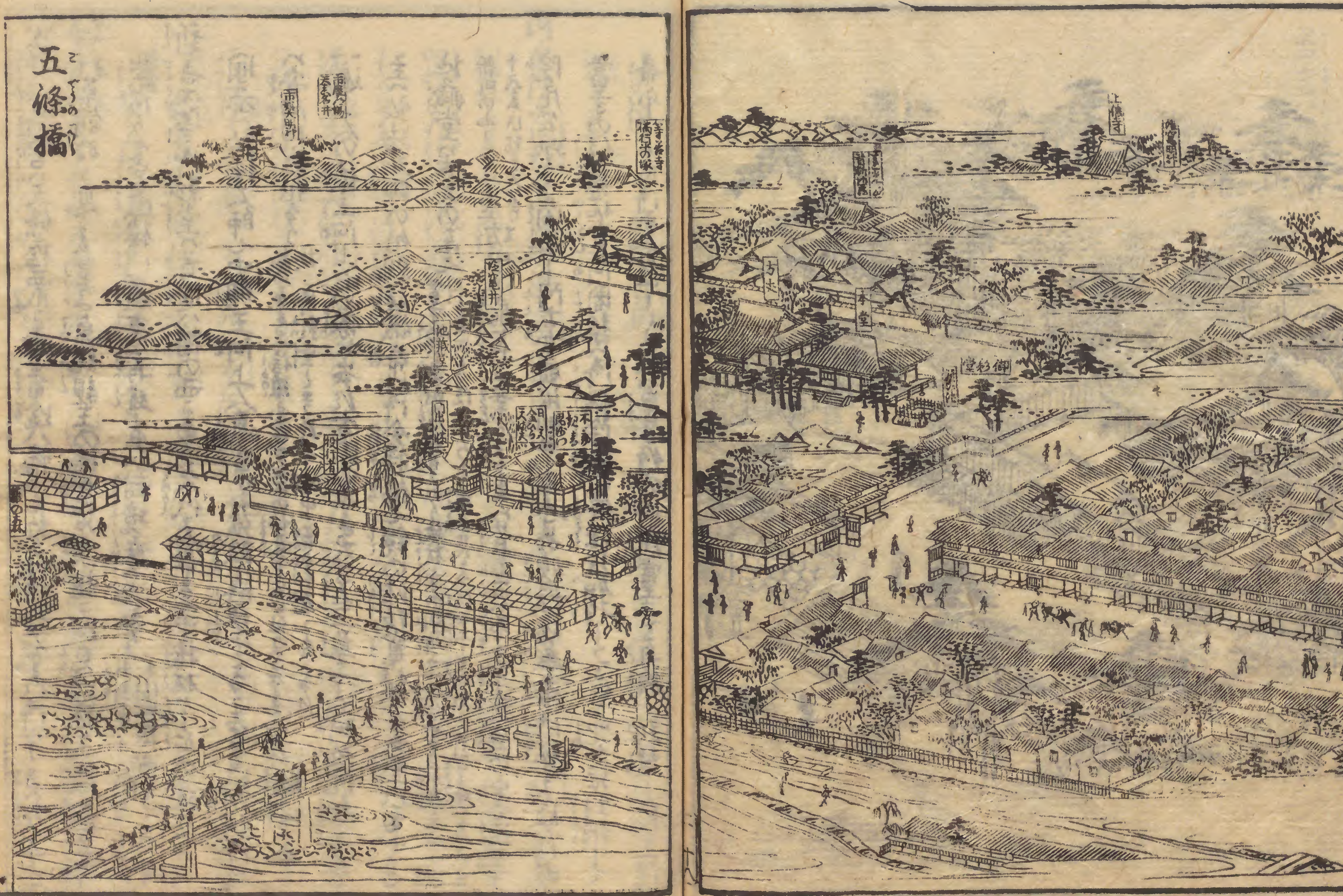
奉行　芦浦観音寺舜興
　　　小川藤左衛門尉正長

此橋上北半より東ハ西への洛東の勝地の面々を詠じて平安の佳景なり

蒲団着て寝たる姿やひかし山　嵐雪

若宮八幡
末社
春日社
神楽所

五條橋（ごでうのはし）



松豊八幡宮ハ五條橋西にあり首途八幡とも称す清和天皇の御宇貞観年中に草創あり貝ハ後皇子貞純親王の御霊を祭る親王の息ハ六孫王経基と尊崇ありて宮殿楼門巍重に再建あれハ封境広大なり　外封凡八十二町ありしとぞ平清盛の代滅亡して今になる

新善光寺御影堂ハ首途八幡の西にあり元代天応年中櫓林皇后の建立にして開基ハ弘法大師之中興ハ王阿上人真言宗派にて時宗にてあり本尊ハ阿弥陀仏　脇壇にありハ安阿弥の作なり　初の本尊ハ信濃の善光寺の如来をうつし作りて本尊とせん故に御影堂と号す今坊中よ安置ん　一遍上人の像王阿上人の像を安す方丈の本尊ハ一光三尊にて阿弥陀観音勢至ハ弘法大師の作則嵯峨帝の御念持仏之鏡の御姥竈の井ハ本堂の南にあり地蔵堂ハ方丈の東之　当寺始ハ東洞院春日にあり櫓林寺の別所にて尼寺なり永安年中に炎上し東河原院にうつりを應永廿八年佐女牛室町の北に引享禄二年五条新町の北にうつる天正十九年此地にうつると

坊中小扇とおもて業とするまんハ昔平家太平の敦盛の室蓮華院尼公此寺に閑居し阿古女扇を製して今の具に渡りて後鳥羽帝御悩ありけれハ當寺の住職祐寛阿闍梨ハ御悩除滅の修法を加持し又扇に四九文を封納して帝に上るに即御平愈ありしかれハ皇子行の御所當寺を再興し剃髪ありて王阿上人と号しける扇ハ此古例によりて世に名あるとなり高貴よ献して都鄙に賞翫とするなり

河原院の旧地ハ五條橋通万里小路の東に八町四方にあり　鴨川ハ此殿舎より此所へ融左大臣の別荘にして臺閣水石風流をつくし遊蕩の美を擅にし山及築山にハ草木繁茂し四時の花絶えず池を堅くて水を湛へ魚鳥ハ波に戯れし陸奥の松島を模られし塩浦より日毎に潮を汲せ管絃ハ仙其堂に調じ文籍ハ月殿に翫びまた大臣薨しもひて後寛平法皇此勝地に遊覧し東ハ六條院と號を具後佛閣となし融公寺三の御子祇陀林寺の本主仁康上人にゆづり知識ところとめて丈六の釈迦仏を作りて此院に安座しまいらせ河原院と號しける　今の五条橋の南鴨川高瀬川の間に森ありゆかりのある籬の塚といふハ河原院の古跡と

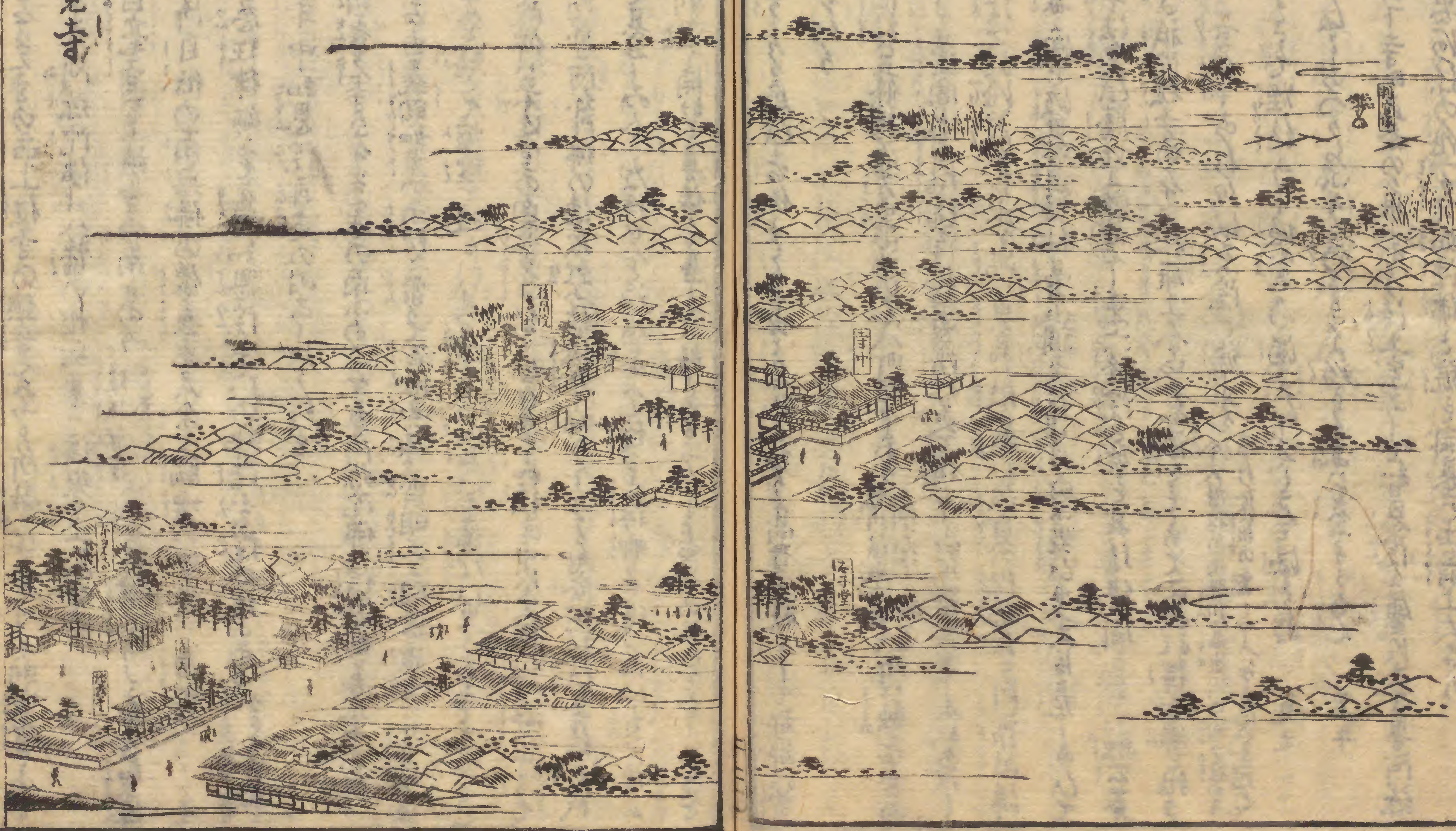
古今
君まさて煙絶にし塩竈乃浦さびしくもみえ渡るかな　貫之

続後拾
塩竈にいつかきにけん朝なきに釣する舟ハ爰によらなん　業平

本覚寺ハ下寺町五条の角にあり浄土宗にして智恩院に属す本尊阿弥陀佛ハ安阿弥の作一名ハ如法佛と號す開基ハ玉翁上人なり

東九條
判官塚
下寺町
長講堂
太子堂

本覺寺



塩竈社は本光寺の西上徳寺の鎮守なり河原左大臣融公にして則塩竈と
號す本尊阿弥陀佛は八幡の作開基は傳譽上人なり

太子堂白毫寺は上徳寺の南にあり 速成就院と号す 宗旨は律宗にして本尊は聖徳
太子は御自作の南無佛の像長二尺余又脇壇の四天王は唐作なりとぞ
開基は忍性律師にて舊は知恩院中門の北浩徳院の後にあり 今其地に古井あり太子水と號す
慶長年中知恩院再建の時こゝに移す

来迎堂新善光寺は本光寺の南にあり本尊阿弥陀佛は信濃國善光寺と同一
躰なり本尊由義助如来の示現を蒙りて百済國の齊明王に閻浮檀金一斤を鎔
朝し如来を鑄させて爐壇を據して其中より分身の像現れ出る故の本尊也

眞別阿弥陀佛は来迎堂の南蓮光寺にあり此本尊は永禎年中に東國の僧都にして
佛を安置のちに阿弥陀佛の像を彫刻し帰らんとする時安阿弥此尊像を希代
寄とて悉く望み今に参拝せんと暮にて趣る山科郷にて追つけ此上旨を謂み
かの僧則笈を開けて尊像分身して二躰となる二人ともに其の奇異のおもひをなし二尊を

東西に貸つて別に其地は今の山科の眞なりし安阿弥に眞帰して像を寄付する事ある

馬上地藏 當寺にあり元祖の像中に埋しは平清盛駒にまたがりて通りかゝる途に止て進まず不思議をあ
して後し出る所なりはじまりは六条河原の斬罪の場にありしとぞ

後白河法皇の宸翰は来迎堂の南長講堂にあり當寺は法皇の御建立にして時く御
幸ありて貴賤を論せず叡聞に達する亡魂を名帖に記し給ひ常に御回向ありて御諱
を修し給へる所ゆゑに長講と称しける 妓王 平家物語に出るは後白川法皇の長講堂の過去帳に妓王妓女佛刀自等が尊霊と四人一所に入られたり

萬年寺の天満宮は長講堂の南にあり初は聞之町万年寺通の南にありしを 在田地に移さる の古木あり

鬼頭天皇は本光寺の東南竹林院の堂内にあり 正安二年の春後伏見院の御宇に此辺に悪鬼あり
此小面を着て叡覧に供へ奉り朝夕に勤め
よ官女をと又初連理の式をすと又を八重姫が娶るに嫉妬する事ありて水をも食を断て死を
重〓〓にて是を提れ鐘し出家の縁起像を三鬼が悟り苦楽坊と號し前に
しても居ける所にこれに應する時に朝夕亡魂鬼女と現し苦楽坊の頭を取れ
然年余を功けりても其に嫉佛し末代其證として頭をのこし鬼頭天皇と號しける

撫行平塚は竹林院の南養善寺にあり

市中山金光寺は時宗にして本尊の阿弥陀佛は定朝の作開基は定阿上人なり 初は塩川七条にあり今の
本願寺境内にありしを此地買人の 市比賣社 當寺にあり以前の祭 天眞井 本堂の西にあり
市場さかりの市座の場しものなり 天月十二日 名を水の

延壽寺は金光寺の南にあり本尊は丈六の釋迦阿弥陀二尊共に銅佛 初は四条大宮にありしを今の金光寺と云

夕顔塚は五条あたり今は堺町松原北にあり源氏物語にある夕かほの君此所に住給ひけり

新古今

白露のなさけおきける言の葉やほのぼのみへし夕顔の花　前太政大臣

籬の池は高倉五條の南宗仙寺の堂前にある井をいふ舊河原院の封境にして其遺跡なり當寺は曹洞宗にして開基は大江和尚なり（本堂の額は正水が筆なり）

藍染川は五条高倉坂経て間之町より人家の下を南へ流る濁水なり（是も河原院の[illegible]といひ傳ふ）

花開稲荷社は松原通高倉の西にありといふ（稲荷町）此所は松永貞徳翁が居所にして

俳書御傘坂撰を

古宅立春といへる坂五条花開の家にていつて

（[illegible]集）

おのづから蔵坂門の松にみそあれる宿は春にあふその翁　貞徳

五条花開の宿に會して夕白の坂

小車は晝のしれよとなるかしおのでて見と我に夕顔の花　仝

又条の宿にて案想　稲荷の社は頃の名ある

古人の此花さきの跡にて此所むかし花さき

ところといひ傳ふるとこそ其の名もにて

萬代をかけのやしろは春秋は花さきそのれしとれぞ　花吉

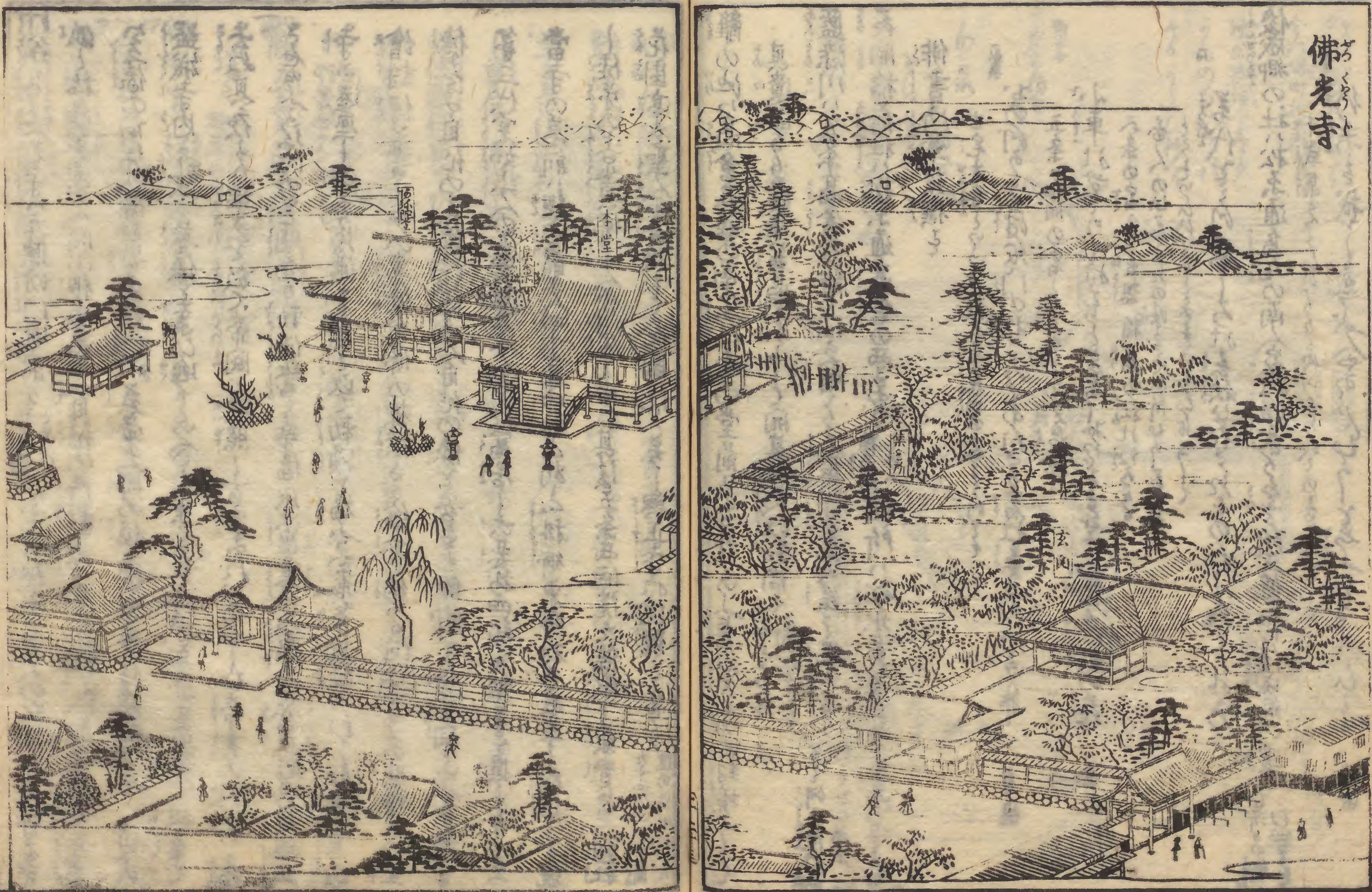
俊成卿の社は松原通烏丸の南人家の後にあり此所五條三位俊成卿の霊を祭る（此所の地主神也）

千載集えらび給ひける時みずからへての歌をつみて

新古今

行末を我をも思ふ人やあらんむかしをおもふ心ならひに　俊成

佛光寺（ぶつくわうじ）



国立公文書館
National Archives of Japan

汁谷山佛光寺ハ五條坊門通にあり（初ハ興正寺と号す）宗旨ハ親鸞聖人の弘法にして佛光寺
派といふ本堂並ニ開山親鸞聖人自作の御影を安置す（継像にて長ケ二尺余）阿弥陀堂本尊
無量像の阿弥陀佛を安置す（長三尺ニ寸五分）是聖徳太子の作にて本尊ハ後醍醐天皇の御時
盗賊寺内に乱入し尊像を奪ひ逃るといへども重くして詮方なく一条河原に捨置て
去ぬ其夜より瑞光を放て帝闕を映照し百官おどろきあやしむ帝光の所に来を
させ給ふに弥陀の光明なり勅使驚て尊像を帝に奉る宮中に安置ありて其後興正
寺に遷座し寺号を佛光寺と改て勅額を給ふ又宸筆にて染られて親鸞聖人の
絵詞伝を書しめし事ハ専修念佛の棟梁たる綸旨を給ふる阿弥陀堂の脇壇にハ聖
徳太子自作の木像法然上人自作の像を安置す余間には存覚上人の年賀寺
第三代覚如上人の息存覚上人ここに寓居し六要抄四部九帖等を撰しおしたま
當寺の草創ハ親鸞聖人四十歳の時山州山科郷東野村に建立し興正寺と号
し徒弟の上足真佛上人に附属しぬ其後五条西洞院九條殿下兼実公の別荘
花園亭を聖人に寄附して花園院と号し興正寺に院号をなせり（九十四代の帝花園院の御時園）

題り後醍醐帝の御宇元應元年に當寺を以て今此叡竹中庄汁谷に移を
改む（今七条河原）南ハ菅谷を限り北ハ汁谷大路に
東ハ阿弥陀峯を限り西ハ柳原に至り と云々
至る其後足利尊氏公の祈願寺として佛供田を寄附しかし後中興了源上人と
し尊信し僧侶諸国に充満し塔頭四十八坊に及べり然に文明年中當寺十四世
の住職経豪上人山科本願寺蓮如上人に属し寺僧四十二坊其外国々の門徒
数輩随順と故に経豪上人の舎弟経誉上人當寺の住職として十四世と相続
す（所在の地ハ今の寺内也）秀吉公の時大佛殿建立にあたりて此地に移さる
四條之壹貫ハ四条通東洞院東をいふむかしの大内裏の時此所に法品を成す市
場也（今毎朝高倉四条の北に野菜の市立ハ往古の遺風也）
神明宮ハ綾小路高倉北西にありおほよそ伊勢内外両神宮なり
大原社ハ綾小路新町の東にありおほう所伊弉冊尊なり（丹州桑田郡大原社と同神也）
富貴薬道場といふハむかし四条の南新町と西洞院の間にあり今富貴薬辻子といふ
白天神社ハ東洞院と烏丸の間なる辻の北にあり竹之辻子といふ清香庵と号す

因幡薬師
西の坊
不動
阿弥陀
妙見

因幡堂平等寺ハ松原通烏丸にあり寺務ハ天台聖護院門主寺僧ハ真
言宗なり本尊薬師如来ハ立像にて長五尺二寸碁盤の上に立たまへり脇士
ハ日光月光十二神八大菩薩を安置す傳記に曰此本尊ハ天竺祇園精舎四十
九院の内東北の角療病院の本尊にて牛頭栴檀の像にて釋尊手づから刻
み給ふ聖容なりしが此の伽藍破壊に及んとせるの時東方をさして飛去り給ひしとなり
一條院の御宇長徳二年因幡國賀露津の海面に夜な夜な光ありて國司橘行平
卿漁人に命じて網をおろさしめ海底を潜らしむるに光明赫奕として薬師仏を引上
奉る其後七年を経て長保五年四月七日に行平卿の居館烏丸高辻に飛来して
飛来したまへり（後光臺座ハ因州より上り 歴光寺と号す今にあり）則館を佛閣に造りて安置しける今の因幡堂
なれども本願ハ行平卿の息光朝禅師なり則寺務とし承安元年四月八日高倉
院より勅額をたまひ平等寺と號を永暦二年には後白川院此所に幸しける今の
堂ハ足利義教公の再建なり橘行平卿の木像ハ堂内西の間に安置せり東の間
にハ夜叉神を安す（後堂に井戸あり 火災の用なりとぞ）鎮守ハ後白川帝の院宣によりて十八所の神を

勧請し後に神託ありて蛭子神（一所とかへ故に十九所なり）観音堂の本尊ハ慈覚大師の作愛染明王
弘法大師を堂内に安置す護摩堂ハ本堂の西にありて常に注連を張る（毎年二月十九日ハ初
縁供養あり一日ハ此日に注連を引するなり恒例とぞ）執行薬王院にハ大黒天を安置す（當院ハ祇園御旅所蛭子社を兼帯す毎年
六月七日此所より出る）歓喜天ハ不動明王を安す拙の坊にハ稲荷水室秋葉社三
社を安置す虚空蔵を安置す西之坊にハ金毘羅を安置す桂芳院にハ稲荷
社あり又不動役行者を安す長伯寺ハ裸形阿弥陀仏を安置す慈覚大師
二條天皇の頭に作り女人成仏の證に作り給ふ金堂ちの阿弥陀仏ハ春日の
作なり（京極誓願寺 旧称なり）又粟島明神妙見菩薩を安す角の坊にハ稲荷大明神鎮座す
又當寺の本尊ハ日本三如来の（信濃善光寺 嵯峨釈迦仏）其一にして釋尊在世の尊像也
御戸開あるハ勅會の法事音楽等ありて厳重なり代々の天子御忌年
に當らせ玉ふ年ハ毎月勅使参向ありて御祈祷あり又薬師講とて
繁昌す社ハ高辻新町の東にあり名所辨財天女之（今真言の僧あずかる）當社門前町
の産砂神とし祭ハ九月廿日也

朝日宮は白山通五条の北にあり。祭る所天照太神なり。清和天皇の御宇貞観年中倭姫の御告によりて丹波国桑田郡穴生村に造宮し、其後正親町院の御宇元亀二年今の地に遷座し給ふ（祭日九月十六日）。猿田彦神石（社内にあり）霊験あらたなり。飛梅天満宮（末社六ヶ所の内にあり。古木を蔵む。別に菅家の額あり）。

神明宮は富小路五條の北にあり。古此辺は融大臣の殿舎にて、封境の地に伊勢太神宮を遷し拝所とす。後世あらたに社を建る（祭日九月十六日。今も其言伝へ侍る）。

諏訪社は五條の南二町諏訪町にあり。祭る所信濃国諏訪の社と同じ神なり（勅使を奉して此社に祈誓ありて剣を納め給ふことあり）。

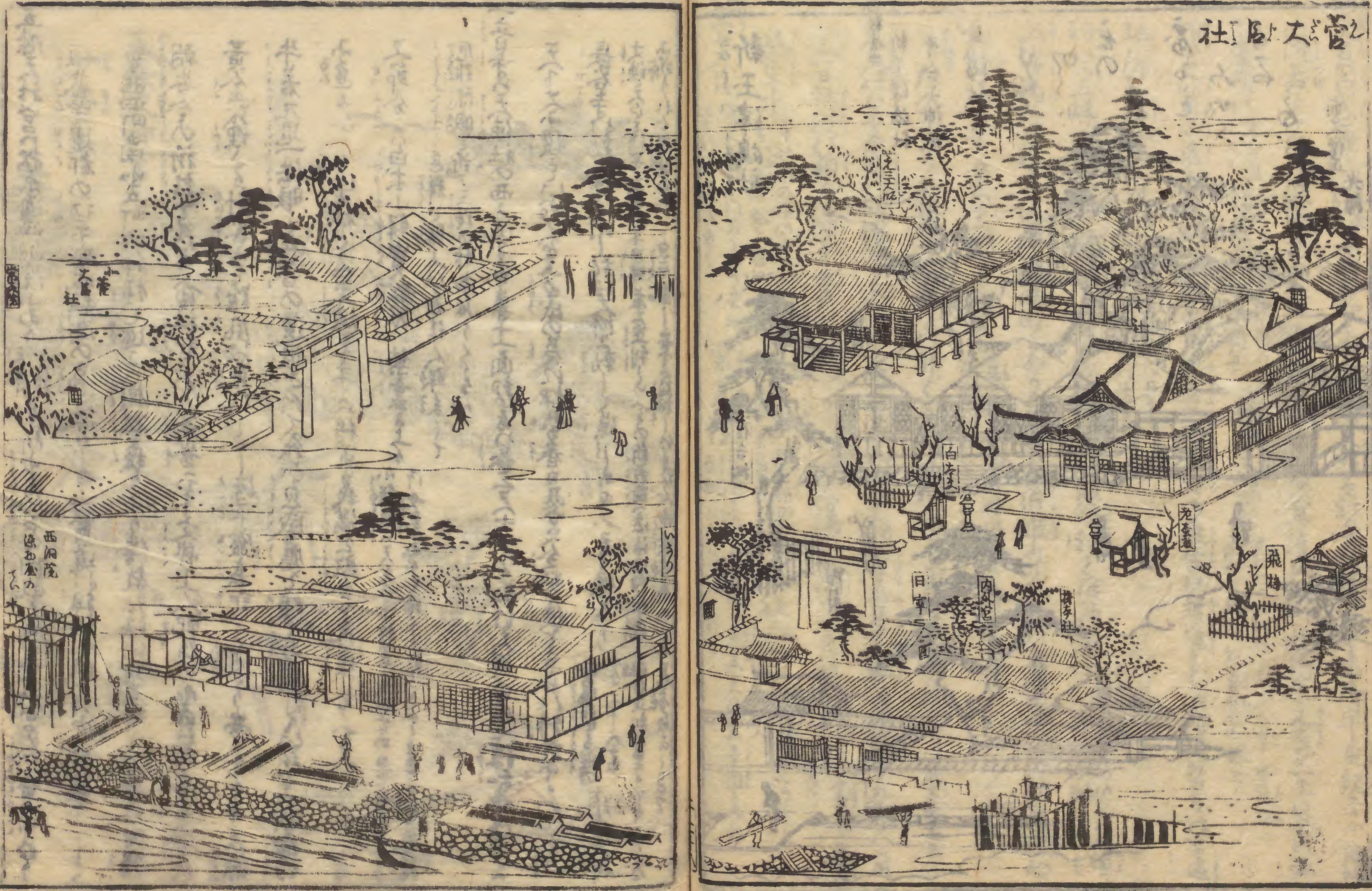
新玉津嶋社は松原通玉津嶋町にあり。祭る所衣通姫にして紀州玉津嶋と同神なり。後鳥羽院の勅請なり（文治六年十一月十二日之。為家卿若年の時此社にて毎月六度ツヽ百首の歌をよみ奉りしとなり）。

新後拾
たのむかな和歌のうらわの跡とめて初し玉津嶋姫　前太政大臣

菅大臣社は五条坊門西洞院にあり。祭る所天満天神にして則菅原是善卿の館なり（祭日八月十六日）。拝殿に額天満宮と書る（竹内御門跡良恕法親王の筆なり）。天満宮降誕之地（八分字の石表あり。書者亀石の筆なり）。

誕生水（本社南の垣の内にあり。石碑の銘を書る）。大師堂（天満大神自作の像を安置す）。榎本社（近年ここに勧請しけり）。

北菅大臣（菅大臣の北小門町にあり。祭所菅神の御子なり）。常喜院（北菅大臣の西に隣る。荒木天満宮堂内に安す。金剛力士堂あり）。


菅大臣社
飛梅
西洞院

五條天神宮
一音寺

五條天神宮ハ松原通西洞院にあり　祭所ハ少彦名命　相殿天照皇太神　大己貴命なり
桓武帝遷都の初平安城鎮衛の為造営しあり　八醫道にて祖神とす　古ハ宮殿巍々として
東西四町南北五町の神領に巡りに樹林森々たり　傳教弘法の両大師も入唐の時帰
朝安全の祈祝を修す当社記にあり　承安二年文覚上人配流の時当社の鳥居の下に
黄金を埋て計略をそ雑説ありしハ源平盛衰記に見へたり　又安元々年二月源
牛若丸鬼一法眼の兵書の遺恨をもって殺ひんと感応を得て打勝しハ此所也　又武蔵坊
小角達なんハ山林より出現せり　至徳元年ハ将軍義満公殿舎を再建しあり　今ふハ九月十日
又節分にハ白朮小餅寳船　禁裏より上る　小餅料ハ天文二十三年将軍義輝公の母公慶寿院より御寄進ありて今も年々其勢の例也
としとして上より料を賜ふ　此夜諸人群来して
厄難除滅を祈る　二條の神あかふくるり
一音寺ハ天使社の西に隣る　本尊十一面観音ハ長さ一尺七寸そ弘法大師の作　仁和帝御宇に
天下大ニ疫をしハ時天皇万民の為に伊勢春日鹿島へ金幣使を立られ弘法大師に詔をよんで和州
長谷寺に於て祈られし弘法大師に勅して造りしめ給ふ尊像なり　泊瀬観音の疱瘡神　第二十八番
文徳天皇の御宇天安二年星野義正利といふ者の新羅國より渡海の時疱瘡を病む正利当寺の本尊に
祈りけれハ疱瘡平癒しけり　今ハ此様に施疫悉く癒して愈しけるとなん

壬生寺
本堂

新住吉社ハ醒井通高辻角にありむかし所がら別住吉明神ハ後成院勅請し給ふ 出しを
荒神社ハ醒井高辻の北にあり文永年中摂州勝尾山より勧請なれ 近江川に侍荒神 寂照の地なり
化粧水ハ西洞院四條の南にあり いにしへ此所に小野小町の別荘ありしとぞ 三間半
蟷螂ハむかし小野小町まふろかうけし人あるとき 小町四條通人家の下級西へ流れ西洞院川へ入の清水あり
蟻入て死せしゆへ故に婚礼の輿入此橋を通らず 扱而
小松内府重盛別業ハ室町四条の南西側にあり 一説ハ六波羅ハ宝任の旧地といふ高倉
扨恵比須社ハ猪熊通松原北にあり禁所 蛭子神之 おくり通ハ本蔵と清水今にあり
天道社ハ五條坊門猪熊の角にあり祭所日月の神なり 當社の付ハ祀哥重人自筆の大字の名号あり十月廿日にあれ
御太刀松ハ四條猪熊の角人家の裏にあり源義経此松に太刀をかけ弁の庵あり
くを堀川の館の封境なれバ實ハ旅館の松なり
石神社ハ石井通二条の南にあり 祭所豊石牕命 奇石窓命之古ハ此地中山忠親卿の 亭なり故に社を移ん
東雀寺ハ四條通堀川西にあり淨土宗にして本尊阿弥陀佛ハ春日作く平將實方朝臣
勅勘をけて奥州にまて五十年の後其霊雀と化して此寺の森に棲く住
主觀智法師ハ寺廷の故に雀寺ともいふ 此辺に善は本寺の勧学院 實方塚 寺内にあり
の跡なりしといふ

壬生寺は五条坊門朱雀の東にあり宗旨は真言律にして和州招提寺に属す本尊地蔵
菩薩は坐像長三尺定朝の作なり当寺の草創は一条院御宇正暦二年にして
開基は三井寺の快賢大僧都なり（姓は藤氏にして粟田関白道兼公の支族なり智證大師に随身して天台の奥義を究む永承十六年十二月十二日寂す）
地蔵の尊像彫刻の志願を発し仏工定朝に命じて一千日の間一刀三礼して
円備なりて恰も生身のごとし供養の日本尊より四方
に光明かゞやき異香薫じ音楽雲に聞えて聖衆来迎の如し午時ばかりに及んで漸く暗く
本尊を拝すれば自然に一錫の錫杖を持して一寺みなあやしみけるに錫杖は釈尊
伽羅陀山にて延命地蔵経を説く時手より出現すと告あり当寺の最初は草堂を
建て安置せしが長弘二年に堂供養ありて小三井寺と号す其後後深草院御宇建保
年中に和州の平政平宗平氏平平なりし利益を蒙りて堂舎僧坊悉く造営す此時に
寺号を宝幢三昧院と号し地蔵院と称す白河院鳥羽院後白河院順徳院など
御信仰ありて勅願所となり其縁起は世に伝ふる所なり中興は円覚上人
大念仏 円覚上人より始る毎年三月十四日より廿四日まで 壇供 毎歳正月和州服部の者中に
より始る抜くの猿楽をなし見物人と斎の法会とす 役人来りて納むる事あり 献ずる

本圀寺
加藤清正之墓
同一族の墓
経蔵

人丸社
客殿
本堂
鼓楼
二王門

大光山本圀寺ハ堀川松原の南にあり法華宗にして一致派なり開基ハ日蓮上人なり
初ハ相州鎌倉松葉谷に建立ありて法華堂となづけ一宗最初の精舎なり抑
日蓮上人ハ姓ハ三國氏（聖武帝の苗孫なり）父ハ遠州の刺史貫名重実が次男なり母ハ清原氏之
貞應元年二月十六日午の剋に房州小湊浦に誕れ給ふ十二歳にして同國清澄寺に登り道善
と学ひ十六歳にして落髪し名を蓮長と號し後に自日蓮と改む幼稚より賢くして常
に虚空蔵を祈る或時夢の中に老僧来て手に明星の如くなる宝珠を授けれバ袖に受と見しより
して一を聞て十を悟れり然して諸宗に通ぜんとて南都北嶺にいたり園城に入て学び窓に蛍
をあつめ倩諸宗の議判常に出て散しがたく是れハ顕経を撰ミ諸経中に最第一の金言
なりとて衆生成佛の根元なるを悟り知り建長五年十二月廿八日二十二歳にして朝日に
むかひ合掌し始て南無妙法蓮華経の七字を唱へ清澄寺の南面にして一山の僧且外
守護職東條左金吾景信等をあつめて法華を演説し論釈の義文をあらはしけれバ
諸宗の僧徒風の木葉の随が如し是一宗に流布の濫觴なり弘長元年五月平重時
これを妬で伊豆國伊東浦に左遷す又ある時相州竜口の汀にて誅せらるべしとて
敷革に座しのぞみ天俄にかきくもり震動して太刀取眼くらみ剣段々に折れぬ相模守
大に驚き死をゆるしてなほ佐渡の國に流しけるが後ゆるされて鎌倉にかへり
是ハ赦免状とゞめ禍をまぬかれり宗派海内に隈なく流布し後に相模守も貴
敬し上人ハ文永十一年五月に鎌倉を出て甲州身延山に入て草菴を結び玄を究
破折て佛に供し秋の夕山月を好て経書を照し或時夜の雨の窓によりて詠れる上人

ゆらバ邪にふる雨ハおしし風そそる窓をうつ川しらぬ　日蓮上人

後宇多帝の御宇弘安五年十月十三日武蔵國池上右衛門太夫宗仲の家にて遷化なり　行年六十一歳
鎌倉松葉谷の法華堂を日朗に附属し又日印これに住し日静の時勅願所となる
光明帝の勅に依て相州鎌倉より洛陽六條堀川に移る

本堂ハ法華経を本尊とす　日助僧都筆
立像堂にハ釈迦佛を安ず

祖師堂　日蓮上人の木像日朗日印日静日像の像を安す
刹堂

方丈　妙法の額ハ後光明院の宸翰なり
摩社
皐諦石
鶖鷺曼陀羅　日蓮上人の

佐女牛の井ハ醒井五条の南にあり井筒に銘あり

佐女牛井
元和三年
右黒再建之

足利将軍義政公茶道に寵せられしと此の水を愛しけりしかハくみて今ハ関の人もくまぬ草深く苔に埋もれても埋もれたれども末の世のしらぬ人間に出で白ハ謹

石梵文蒼苔
寒泉湛月明

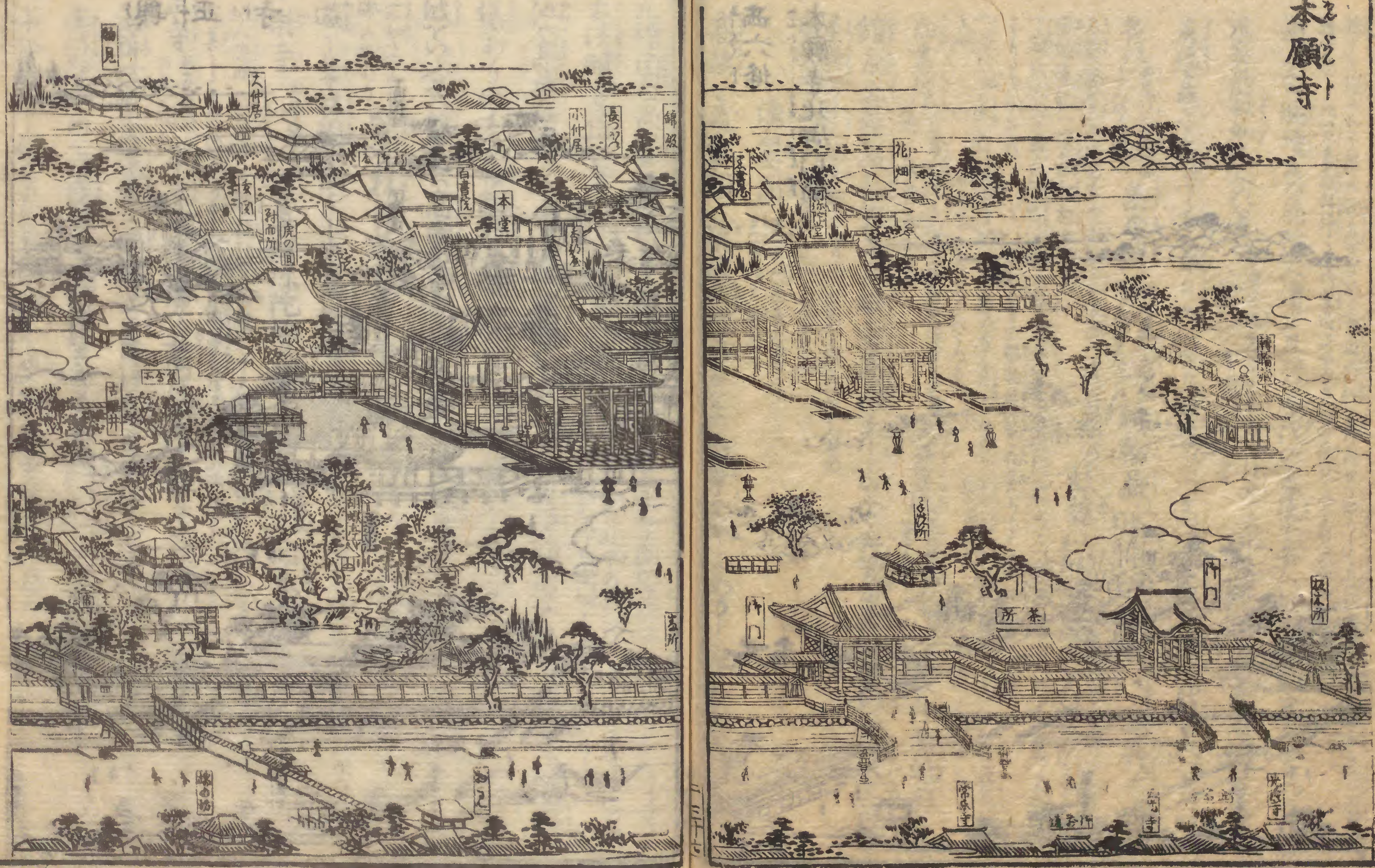
古きの法然をもしのぶべし

本願寺ハ西六條にあり宗旨ハ親鸞聖人の弘法なり聖人の傳ハ束春草便に當寺の草創ハ亀山院の御宇文永九年聖人の息女覚信尼公（日野左衛門佐廣綱卿の室なり）植髪影堂の所にあり勅を承けて洛東大谷に始て廟堂を建立ス開山滅後十年に當り亀山院勅願所として龍谷山本願寺の號を賜ふ第二代如信上人（開山の嫡孫善鸞上人の息なり）具須奥羽大網郷に居住ス故に覚恵法師（廣綱の子母ハ覚信尼なり）第三代覚如上人大谷の留主職となり是より覚如上人を第三世とし継て後伏見院正安元年に勅願寺とられ綸旨を賜る第八代蓮如上人の時宗派大に繁昌し究開山の在世に超こゆ山門の衆徒これを妬で寛正六年に當寺を破却ス又寺門三井の流浪ハ蓮如上人小荷擔し近松寺に寄附し聖人の影像をここに移すこれより蓮如上人ハ小国に経回し越前吉崎に御堂を営北陸七州を化益し其後文明十一年山州山科郷に影堂を建立し第九代實如上人に紅衣を賜ふ第十代證如上人の時御堂を摂州大坂石山に十一代顕如上人の時二品親王の勅書を賜り御門跡の號を勅許ありて御堂を紀州鷺森にうつし並に天正十九年八月ニ六條堀川に移さる（委ハ信長記拾遺にあり）本堂ハ開山親鸞聖人自作の影像を安置ス（此像ハ開山在世の時彫刻ありて息女覚信尼公へさづけ給ふ）聖人の滅後遺骨を細

西六條
本願寺北御門前

抹して漆に和し彩色同ませり故に骨肉御影と称す坐像にして長さ弐尺五寸餘なり本堂ハ大谷本願寺のむかし紫宸殿拝領ありて御堂造り紫宸殿の模形にて堂前の高欄ハ内裏に同じ南北の脇壇にハ前住大僧正其外歴代の画像を安す餘間にハ九字十字の名號を安す寂如上人の筆也 毎年報恩講七昼夜の法会にハ八幡の絵傳壇上にかくる 阿弥陀堂本尊阿弥陀仏を立像長三尺餘にして春日の作なり脇壇にハ左ハ高祖聖徳太子法然上人は画彩色を安す 當御門主法如上人の御筆也 集會所 法会執行の時僧侶あつまる所也 轉輪藏 一切経を蔵む額は寂如上人の筆なり 撞鐘堂 鐘は昔山城国太秦廣隆寺にありしが少納言信西入道の銘あり 鼓樓 此太鼓ハ大和国西大寺にありしなり胴内に其由縁を銘せし豊心丹の主方ハ坊官下間氏にありしなり 由縁鐘銘ハ信長記拾遺に委し 唐門 南の築地長辻にあり此門ハいにしへ豊国社にありしなり 走獣等の彫物荘厳花美にして希代の奇物なり 虎間 より来たれり 對面所 大広間といふ絵ハ長谷川等漢 四方に虎 浪間 天井に波を画 南の方に車よせあり 聚楽亭よりうつしたるを画く 白書院 前に能舞臺あり 小広間ともいふ画ハ右に同じ筆なり 黒書院 画ハ狩野探幽の筆なり 其外関雎殿綺春館永安館桃仙館等の殿舎高閣多しといへども繁中にて名もしらず略す大仲居臺所 もとより伏見城にありしとぞ入口の唐破風に十八公三夫の像あり二ツの俵を踏む 滴翠園 集會所の東にありて名區の十勝あり

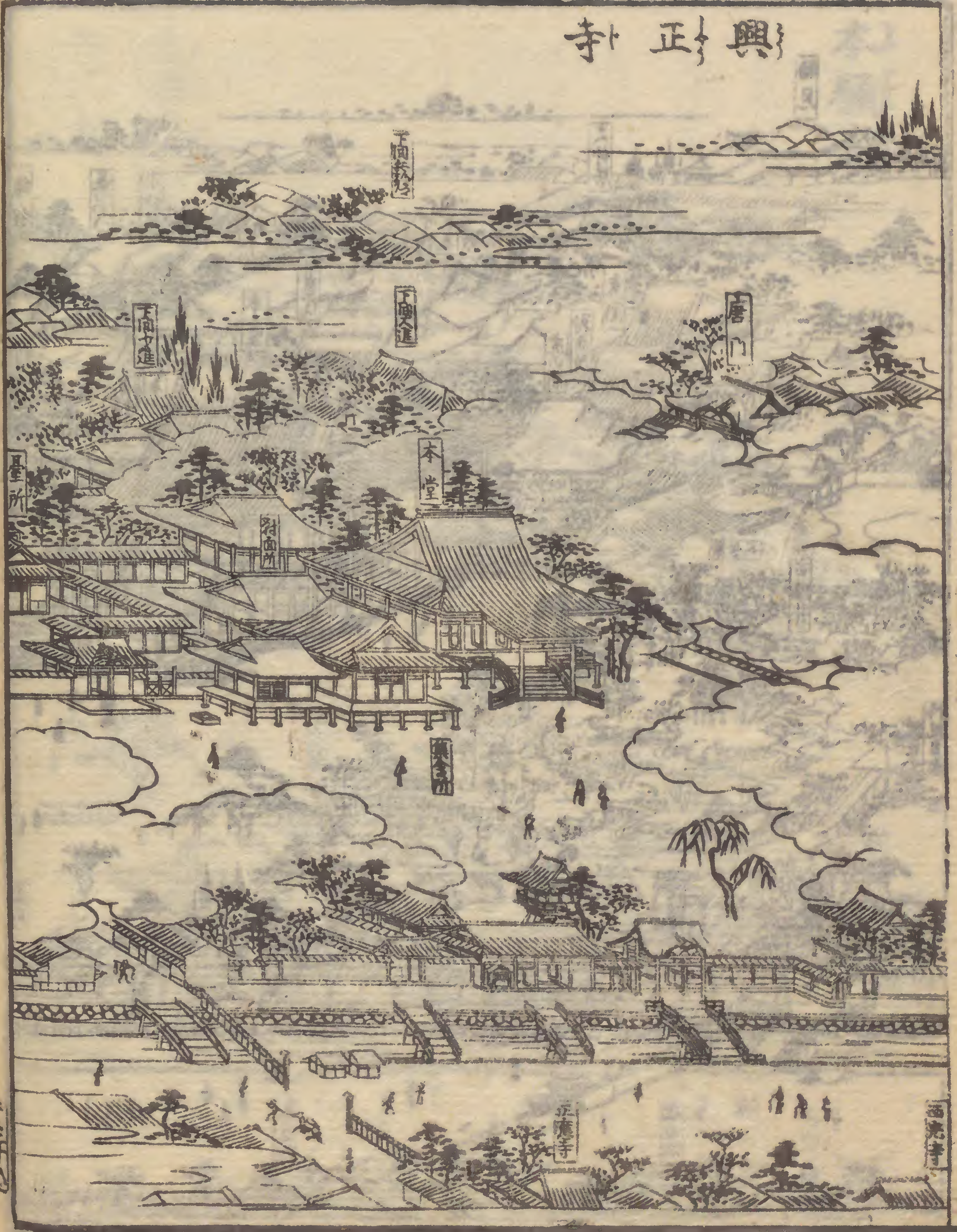
高楼を飛雲閣と號す太閤秀吉公の時聚楽亭にありし故由あれバ此所を移さる

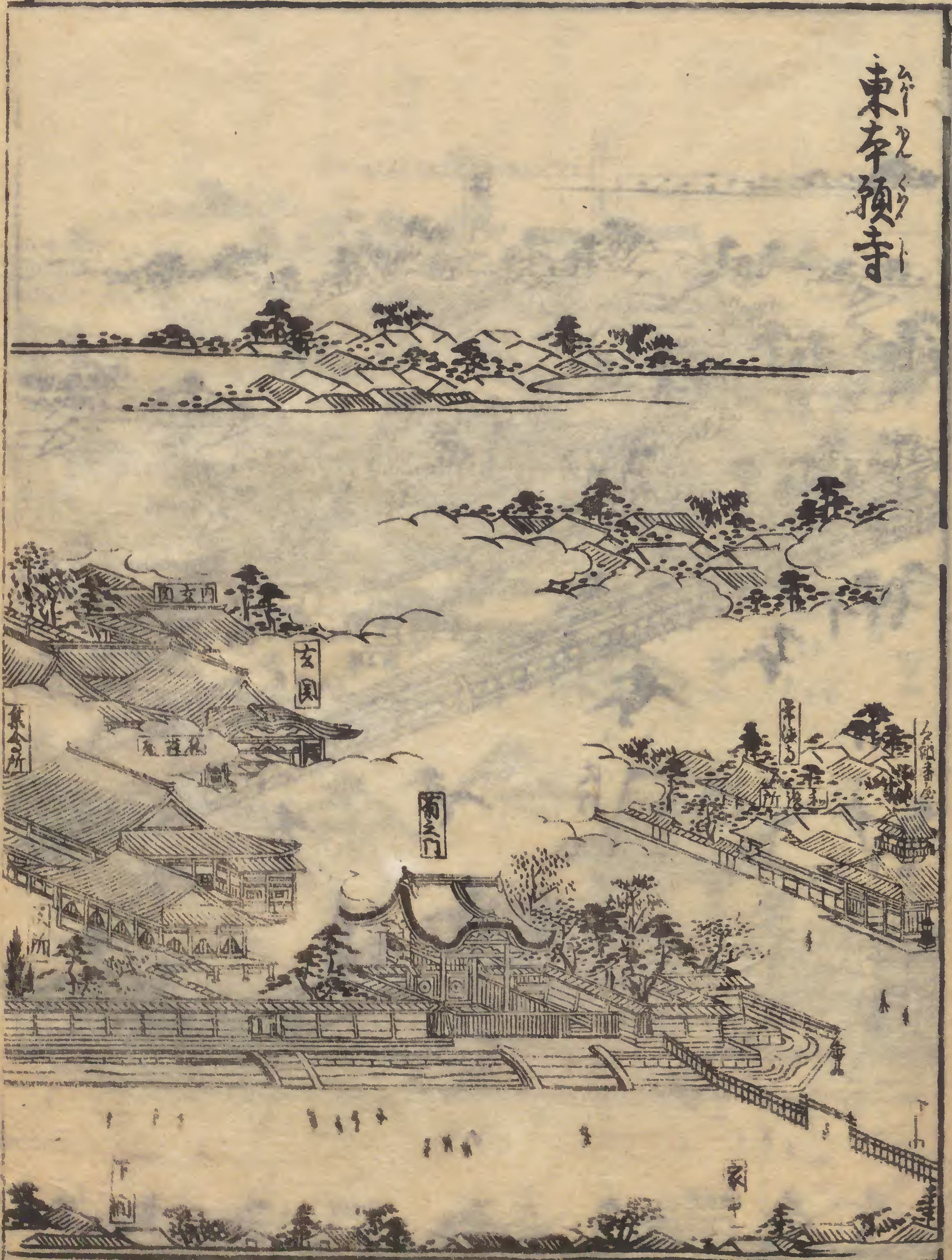

本願寺
花畑
阿弥陀堂
大仲居
小仲居
白書院
本堂
虎の間
対面所
茶所

九條関白尚實公の御筆之閣上の画ハ霞に富士中閣の画ハ三十六哥仙なり
古法眼元信の筆之下を詔賢殿といふ 飛雲閣の記ハ殿中の東にあり十六世湛如上人の作 硯みて當御門主法如上人筆染給ふ
池ハ高樓を巡りて常に船を浮むまた池を滄浪池といふ龍背橋を渡りて踏花
場あり此邊楼樹数品あり胡蝶亭の傍にハ夜光石あり嘯月坡ハ池の巡りの 洛陽七井の其一 當新寺内ニ
坡といふ黄鶴臺ハ高閣の西にあり御湯殿あり醒眠泉ハ一名古醒井といふ
文如上人の 碑の銘あり 艶雪林ハ梅を多し青蓮樹ハ桑亭ありて又澆花亭としもつく簡文の
遊し華林園に同うして鳥獣會魚の如くつ来て人に親の芳園なり

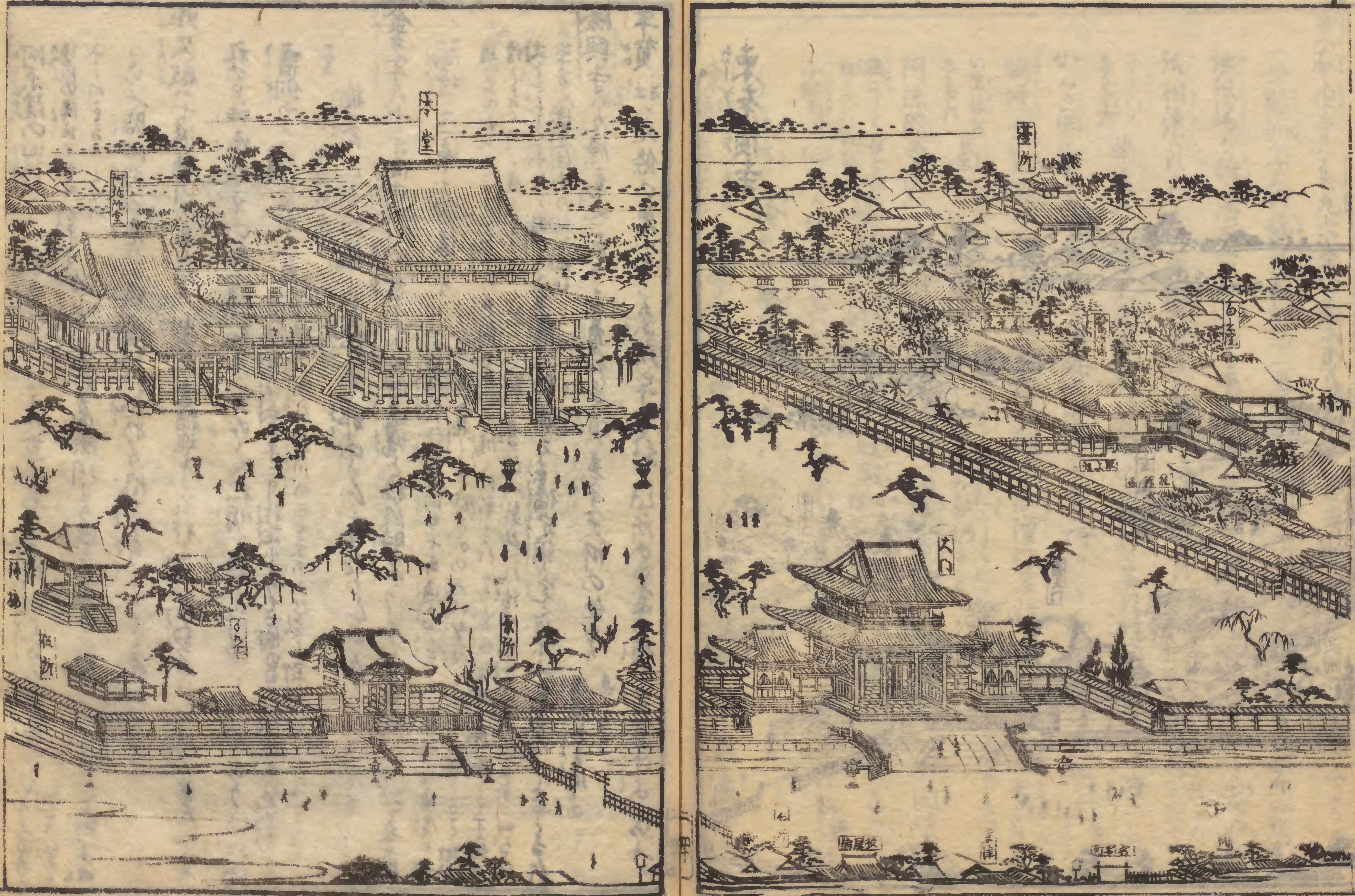
常樂寺
西本願寺 本尊阿弥陀佛ハ春日の作之立像長 開基ハ存覚上人
此人聡明叡智にして顕教を玄智僧正に受け密教を経恵僧正に学ぶその奥旨を悟る 故善しく名を著せり當寺初ハ大谷通に當ハ後洛東小路に遷す常樂臺と称ス

興正寺
西本願寺の南に隣る 本尊阿弥陀佛ハ安阿弥の作之當寺の初ハ宗祖親鸞聖人四十歳の
山科の郷中に造営し興正寺と名付け高弟真佛上人に附属しぬ今真佛上人を
庄け谷にうつし後醍醐帝の御時に光寺と改む 十四世経豪上人本願寺蓮如
上人を帰依し佛光寺を出て新に堂を建て旧号を用て興正寺と称ス 十七世顕尊上人





東本願寺ハ烏丸六条の南にあり宗旨ハ親鸞聖人の弘法にして開山たり第十
一世顕如上人の嫡子教如上人慶長七年関東の　台命を蒙りて六町四方の寺
地を給り新に御堂を建立し東本願寺御門跡と称し宗祖より十二世の血脉を
相續し本堂ハ親鸞聖人自作の像を安置し（坐像にして長さ八寸余 又上別殿ある安置す 台命）
にかれて脇壇にハ前住大僧正其外歴代の畫影を安し餘間にハ九字十字の名號を
安置す
かゝハ開山聖人の筆なり阿弥陀堂の本尊阿弥陀佛ハ安阿弥の作（太子の作とも）て
脇壇にハ聖徳太子法然上人其外三朝七高僧の畫像を安置す　大門（本堂の前にあり 阿弥陀佛）
の坐像を安置す　菊門（大門の北にあり初ハ秀吉公の壯観にして伏見城にありし其の扉に菊の紋の大門之 金を以て彫刻を飾りしものにして洛中の壮観なり）
阿弥陀堂の門（これも伏見城よりうつされたり 世の人日暮の門といふ）　撞鐘堂（伏見城中の井戸の形なりといふ）　玄関ハ式臺
楠にして長七間（幅三間の一枚板也）　寝殿（大廣間といふ 画ハ山楽の筆也）　小寝殿（小廣間といふ）白書院つゞき書院の間
小鷺の間あり能舞臺ハ集會堂の西にあり其外殿閣堂舎等花飾をつくし
して佗境に勝きて繁まんにて其ハ略す
東殿（今ハ百間 御浦といふ）　台命によりて境地を得て東本願寺の別館とせし舊地所なり


阿弥陀堂
臺所
大門

河原院の旧跡にして池亭の出嶋に九重塔あり是則融大臣の古墳なりといひつたふ 融公の社あり
境内の講池下寺町万年寺 池水は東の高瀬川より流て常に溶々として水きよく獅子口
より水を引けりといふ
といへ臨池殿の庭は小堀遠州の好みなり風景奇々として真妙なり
炬火殿は七條鴨川の西にあり當所倉稲魂命を祝ひて天智帝の勅請之稲荷の末
社の日神輿臨幸の時七條河原に出て松明を照し神輿を迎ふるなり 此社の
當社は舊弘長三年二月神託によりて七條の西東洞院の東に建立し 其後應仁の乱後鴨川の西七条の北に遷し宝永八年今の地にうつる
要集 舊例ありて故に名とせん
稲荷の祭日
稲荷山より火を燈し祭をして神の火とし火をたくむなり
金光寺は七条間の町にあり當寺七條道場と称し時宗なり本尊は阿弥陀仏
脇壇に一遍上人の像あり 上人の俗姓は伊豫国河野七郎通廣の息男にて別府通廣が嫡
二人甚盤ふ抛して卧も所の融髪を化して頭と立て鼎八 通久これを見て大に驚き剣をぬいて隠れ斬あたりしが轆轤の不動乃
僧となる時に建長年中也始は台教を学び
文を学びて時宗を
其外上人法定往生の札を弘む
歓喜寺は九條烏丸にあり本尊銅像音は恵心僧都の作なり
其一あり 洛陽観音巡りの
宇賀社は九條の東にあり所宇賀神をまつる所の東西の径を宇賀辻子といふ

東殿
東本願寺別荘なり俗に百ろ[illegible]といへ

藪内紹智の家は西洞院松原の北にあり鼻祖剣仲紹智は千利休の高弟にて附
師に向つて曰秀吉公の寵余人に超たり遠き慮なき時は近き害あらんと諫しかど
利休是を不用して紹智を退く依て大徳寺の三玄院に寓居す利休の滅後洛北紫
竹に住し専ら茶道を行ふ其後鷹司通（今の下長者町なり）新町の西に門をたて本
願寺御門主良如上人の招に応じて今の地に住す故に茶道の下流と称て利休
嫡伝の正流なり古田織部の数寄屋あり（大坂御陣の時此家に譲りて出陣す依て織部の数寄屋と號す）

芹根水は堀川通生酢屋橋の南にあり（近年書家烏石翁此清水に井筒を入て傍に石碑をたて芹根水の銘を八分字に書して石面に彫刻をし又公卿の詩歌を集む其序文に曰）

源融公むかし此邊に居をたまひし風流を愛し既に今の竹林に
ある所にをいて奥州千賀の塩竈の景をうつし汐汲のありさまなどを
弄れしより其附近の家宅の用水となりしが今にくもの妙なる清水湧出て
絶せねはぞくるゐひ此霊水なりし名石揺石碑をたてゝ名蹤乃
所以を公にせんとする今此その費へを喜捨して烏石先生荒工事を等
あそ経営れしより諸君子其事深く善して文藻を属さる
寛雅公は転法輪殿の御子にて随自意院故寺御猶子として上の醍醐殿
恩院に住持しゆへ大僧都法印なり先生の御勧めにより依て御詠を
賜しなり公卿の和歌繁多なれども此に略ん

稲荷社（油小路七條生酢屋橋通の南にあり当所稲荷の社の御旅所の社人田中氏此所に住居す）

不動堂（稲荷社の南にあり不動明王の本尊にて不動堂と此所の名とす）

道祖神（不動堂の南にあり古は五条新町の西にあり猿田彦命を首途神と称す）

書聖天満宮（道祖神の社内にあり烏石翁自書の碑の銘を建る筆字は園八駒の筆なり）

稲荷御旅所（道祖神の南二町にあり稲荷の神輿五座あり毎年二月中の午の日に神幸ありて四月初の卯日還幸まで五座の神輿此所に別て御旅所あり）

春日森　蔵王森（稲荷御旅所の南にあり由来不詳）

寛算石（蔵王森の南にあり此所寛算供奉の遺跡なり寛算が怨霊によりて山門の伏臈を出したりといふ其霊雷となりしは此側に堕てくだけしとあり宮人笠井供奉の伴なりしや長明無名抄に云六月廿六日は寛算が日なりとぞ）

吉御旅所（八條坊門金吾町の南にあり稲富しといふ今此観音は泉涌寺の内にあり此所は二階堂観世音像にして延喜よりの福子）

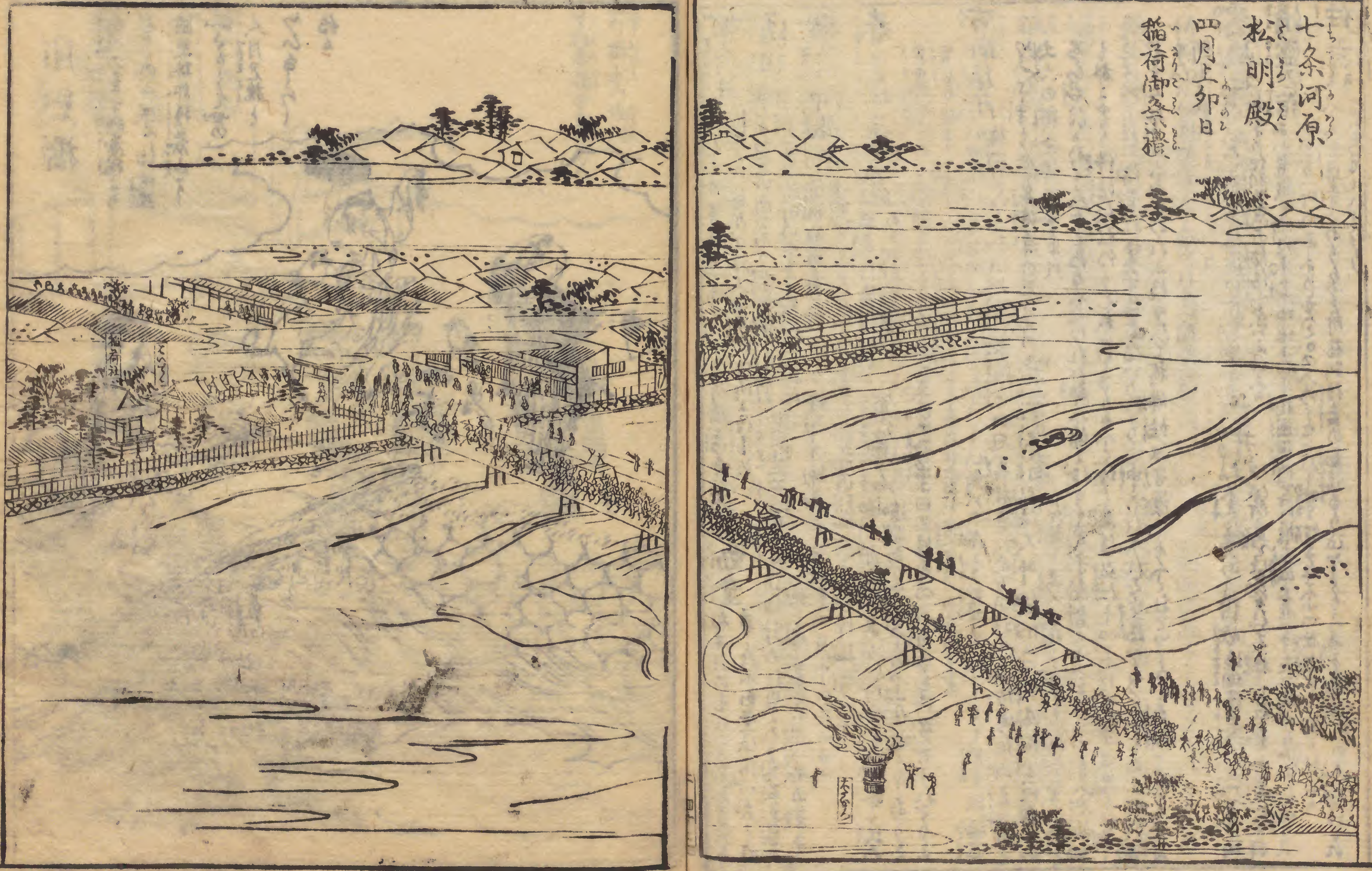
紫宇長者（弘法大師の縁起に曰空海和尚の事を教王護国寺町に住せる紫宇長者といふ者ありて稲を荷ひて来り空海に謁す又其後弘仁十四年に東寺を賜りて住職し給ふ時又此翁に逢ひて此寺を守護し給へと約し即ち稲荷の神を祭る今も泉涌寺の内にあり釋迦佛を安置ん又大師の御作なりといふ其君はいかなる人ぞと問ひしかば都の八條に住する紫宇長者なりと答へし其後二階堂は紫宇長者の宅地にして此所にありしと申すなり則御旅所これなり今の稲荷山は此二階堂の跡にして報ず佛法を守護し奉る社をいふと自ら額を書てかゝせ）

粟嶋社（堀川の西生酢屋橋通の南宗徳寺の内にあり紀州粟嶋の神を勧請す本社は二月三日祭）

古井社（大宮八條の南にあり傳へ曰此社は昔八條太政大臣の第の跡にて名を古井と号す此所に金札を建て附記不詳）

清盛の館（西八條殿と号す平家物語に日平相国禅門の八條の第は西の方一町の亭ありし其ほかの大小の棟数五十余宇なりといへり今の所は焼亡して大小の家々あり此邊の所々八條坊城といふ）

住吉社（大宮中道寺にあり其の所に住吉の神を勧請せり祭礼は六月廿八日なり京極の町の東にあり）

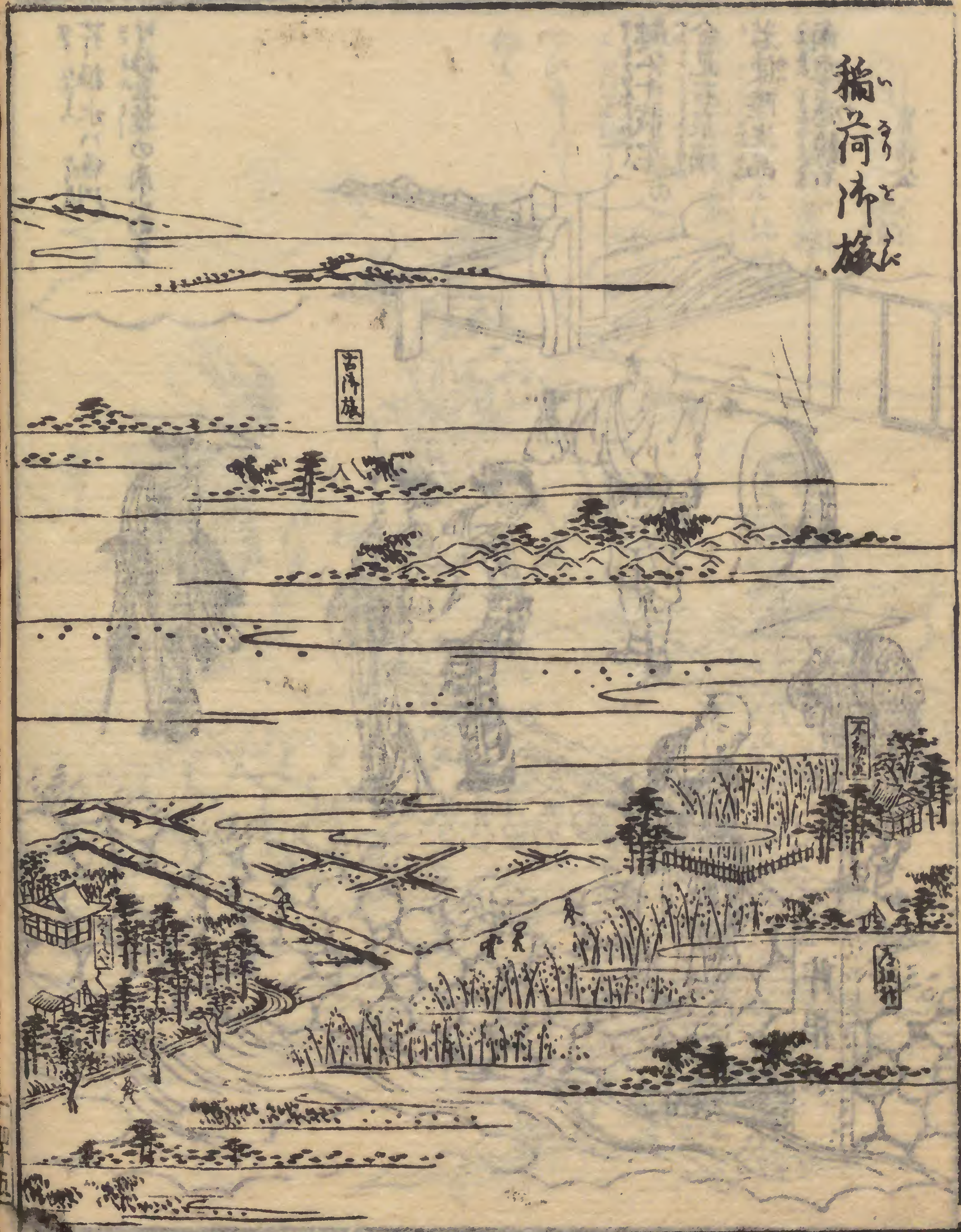


七条河原
松明殿
四月上卯日
稲荷御祭礼

月見橋
堀川の木津屋橋より
むかしの此へんに信濃
国更科郡姨捨山より
移るとて世の
人月見橋と
いひならハし
侍り

芹根水ハ堀川
木津屋橋の南にあり
融公千載宅
今見石泉清
若使陸生品
南零應讓名
寛雅公
芹根水

古井社


稲荷御旅
古御旅

東寺
大師堂
食堂
番所
宝塔
南大門

遍照心院（へんしようしんいん）

八幡山教王護國寺秘密傳法院 東寺又左寺とも號す 大宮の西八條の南にあり真言宗の
源にして開祖ハ弘法大師なり此地ハ大内裏の鴻臚館にして來朝の賓客を饗す之
漢朝の鴻臚館なり不空三藏に給ひて精舎と営し其例に准じて弘仁四年に定る所
空海に給ひ右寺なり守敏に賜ふ杯弘法大師ハ讃州多度郡屏風浦の產にして
光仁帝寶亀五年に誕じ給ひ十八歳にして大学に至り志佛經にありて遂に出
家し延暦十四年東大寺の檀にのぼり具足戒をうけ名を空海と改む密教
にありて和州高市郡久米道場の東塔の下にて大毘盧遮那神變加持經を得
られて文義曉し難くされバ延暦廿三年五月に入唐し大唐の貞元廿一年二月十一日
青龍寺の慧果阿闍梨に謁しかの經の奥儀真言秘密をはじめ大同元年十月に
帰朝し傳來の密法を弘むあり嵯峨帝の勅ありて内裏にて諸宗の名
僧をあつめ空海にめぐりあふ所の宗義を論ぜしむ時に空海の曰我宗にハ大日神
變の真言一咒阿字の秘奥をとかれハ即身成佛をとくとて諸宗の師と議論す
さはらざりしかバ帝空海に即身成佛の相を顯し給へと勅ありしかバ即五藏三摩地
観に入忽首より五佛の寶冠を出し身より五色の光明を放ち面貌金色にして毘盧
遮那佛となり帝ハ御座をおりてをがみ給ひ諸宗の僧ハ合掌して宗にしたがひける此論
あられさる宗門日本に弘まる弘仁七年に紀州高野山を賜て金剛峯寺を建立し仁明帝
御宇承和二年三月廿一日六十二歳にして高野山に入定し其後延喜廿一年に弘法大師
と謚を宣下しめたまり 日本に生死不思議の人三人あり生ありて死ざるハ空海 死ありて生のあるハ天満神生も死もあるハ人丸なり

金堂 本尊ハ薬師佛脇士ハ日天月天なり焼失の後豊臣秀頼公の再建にて東大佛殿の模形なり 講堂 本尊ハ大日如来脇壇にハ金剛菩薩五大尊四天王等あり 食堂 本尊ハ千手千眼観世音聖寶僧正の作なり脇士ハ地藏毘沙門天ハ羅城門の楼上にありしを安置せし地藏なるハいにしへハ西寺にあり

夜叉神 いにしへハ食堂の門に安置せり今礎石あり左右の小堂に雌雄の夜叉神を安す大師の作なり 五重塔 四仏を安す兵火の後に焼失せし後御當家の再建なり此塔の下に白南の方へ傾くあれバよりてくぢの方に佛を納て其傾を直せし 灌頂院 秘密灌頂の所なり

八幡宮 大師神像を彫して安す神像みづから當寺の鎮守とす 八嶋社 故に地主の神とす當寺建立以前の勧請なり

寶藏 大師の法具を藏む巡りに池あり 瓢簞堀 寶藏の南の池をいふ瓢簞の形なり 南大門 二階の楼門也金剛力士安置せり東ハ運慶の作西ハ湛慶の作なり 慶賀門 東の門をいふ 蓮華門 西の門をいふ大師入定のとき此門より出させ給ひしと

猫瓦 巽の方の築地の上にあり此築地造営の時ハ根来ニ京時奉行をもして作人作る

西院開祖弘法大師の影を安置す 法眼康勝の作なり後堂には大日不動尊
大黒天は大師の作なり 西の院の傍に安す 愛染明王 四天王般若菩薩を安す大師の作之
宝持坊に安置す 五寶石 後堂の白砂にあり 一名不動石ともいふ
三鈷松 西の院の前にあり大師唐土より帰朝のとき密教相応の地あらハ此三鈷止るべしとて空中に投給ふ上洛の後此所の松枝に止りたる故に名とす
葉三葉の松なり
松子房松 西の院の乾にあり
梅雲記に曰 元弘三年五月六波羅攻落されて船上より御進発 後醍醐天皇則入洛あり播州書写山にて新田義貞より小俣高時滅亡のよしを注進す楠正成兵庫にて迎奉る時に勅使として東寺へ行幸松子房
みそ此松の下にて御問ありしよしを奏しけるとぞ
前大僧正頼意よみて詠る
植並しむかしやかねて契りけん君が御幸を松風の音
羅城門の舊跡は朱雀通 今の千本通なり 四塚にあり此門は桓武天皇平安城造営の時
初て建給ひける大内裏の南面にして外郭の惣門なり 楼上に毘沙門天を安置す
弘法大師の作なり
今東寺の宝蔵にあり
梅城録に曰 都良香羅城門を過る時に氣霽風梳新柳髪と詠じ
ければ楼上に聲ありて氷消浪洗旧苔鬚とつけけり
是は菅丞相の作なりとて涙しけるとぞ これは自ら歎じ
下の句は鬼神なりしとぞ

萬祥山大通寺遍照心院は八條櫛笥にあり此地は源経基公の殿舎にして
天徳五年に薨じ給ひ後此所に霊廟を建六孫王権現と崇奉る其後鎌
倉右大臣實朝公の後室二位禅尼大檀越となり真空律師を請して
開山とし戒律三論真言等兼学の梵刹となれり
佛殿 本尊阿弥陀佛は 本地堂 興教大師の作 本尊不動明王は
恵心僧都の作なり
六孫王社 本所は経基公の神霊源氏の祖神にして 御當家より造営あり
社前には法供ありて奉納の石燈籠多し 神廟 本社の後にあり 貞純親王社 本社の巽にあり
毎年九月十一日祭礼あり
神龍池 社前の池をいふ例年此池にて放生会あり 辨財天社 長一尺五寸余 弘法大師の作なり 誕生水 源満仲公誕生の時此水を汲て
産湯とし給ふ 洛陽の名水七井の其一なり 阿弥陀佛 立像長二尺五寸安阿弥の作にして親鸞聖人の持尊なり初め佐々木定綱これを安置す
の湖當寺に持来りて今門内の 寶冠釋迦佛 方丈に安置す定朝の作也
宝蔵にあり二月十五日開帳あり 實朝公の持念佛なり
方丈の庭 廬山の趣を模して庭中に絶景あり
満仲公誕生地 八條通大宮の西にあり今六孫王の御旅所となる 歓喜森 七条朱雀の東にあり此所は歓喜寺院の旧跡なり
福大明神森 壬生通の東揚梅の北にあり 由来詳ならず 人丸塚 坊城通る辻の南にあり 由緒詳ならず

嶋原
出口にて
けいせいの賢なるハ此柳かな
其角

嶋原傾城町は朱雀野にあり此所上古は鴻臚館の地なり中頃は觀喜寿院の封境にして西口の畠れ宮の堂のあとなり又傾城郭は万里小路（今は御所の辺なり）二條の南方二町ありて其先は東山殿（義政公）遊興の地なり天正十七年原三郎左衛門林又一郎といふ浪人上訴にまかせて傾城町を免許せられ一の郭を立しあり地名を新屋敷と號し又柳の雙樹ありしかば柳町とも称ふ（今の吉の柳は此遺）風具より十二年を歴て慶長七年に六條へうつされ今の室町新町西洞院也

五條橋通の南にて方八町の郭之中に小路三通ありしより三筋町と號せ（六條通今の魚棚西洞院川より石橋は傾城町の入口にして此所初しにて今に其名あり町又条の南西側醒ヶ井の居宅異風なり此所の忘八あにして今にあなせり）又寛永十八年に今の朱雀野へ移されて嶋原と號る事は其頃肥前の嶋原にて天草四郎といふもの一揆を起し動乱に及びし此里もさいしようつされ騒しかりければ世の人嶋原と異名付けしより遂に此所の名となれり

国立公文書館
National Archives of Japan